
超次元ゲームネプテューヌmk2 男の娘だった女神候補生

トマト畑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲームネプテューヌmk2 男の娘だった女神候補生

【Nコード】

N5219Z

【作者名】

トマト畑

【あらすじ】

かつてゲームギョウ界の平和を守ったシルバーハートのユウ。今現在ニート化した妹達の為にいろいろと働いていた。

そんなユウの前に次元神を名乗る者が現れる。

もう一つのゲームギョウ界を救ってほしいと。

ユウは旅立つ。新たな姿となって…。

『今の私は女神候補生のシルバーシスターです！』

女神候補生シルバーシスターが今世界を救う為に旅立つ。

第0話 男の娘な女神様（前書き）

はじめましてとお久しぶりの皆さんトマト畑です。あの衝撃のラストからの続編です。

これは原作キャラが最早別のキャラへと変貌したかの如くキャラ崩壊しているのでそう言うのが嫌いな人は回れ右でお願いします。

第0話 男の娘な女神様

さて皆さんお早う。こんにちは。そして今晚わ。

唐突で申し訳ありませんが私の名前はシルバーハート人間の時の名前はユウと申します。この世界、ゲームギョウ界を守護する女神の一人です。一応四人の女神の兄をさせてもらっています。兄？姉じゃないのか？残念ですが私はいいや俺はこう見えても男の子「いいえ男の娘」なんです。ん？今何か雑音が入った様な？まあいいか。とりあえず今から妹達の朝ごはんを作らないといけないので失礼しますね。あー忙しい。

第0話『男の娘な女神様』

俺シルバーハート事ユウの一日は朝妹四人を起こしてご飯を食べさせる事から始まります。

「お兄様、私前から気になっていた事があるんだ。」

「……なに？」

「お兄様は胸が大きい娘と小さい娘どっちが好き？」

朝からいきなり問題発言をしてきたこの娘はネプテューヌ。女神化した時の名前はパープルハート。女神化前と女神化後で性格がまったく違うのが特徴である。そして別名『年中発情女神』である。

「……ネプテューヌ貴女やっぱり馬鹿ね。お兄様はつるぺたロリな胸が好きに決まっているでしょう。具体的には私の胸が好きなのよ。」

」

このネプテューヌを馬鹿にした他の女神達より一回り小さい女の子はブラン。女神化した時の名前はホワイトハート。キレると口調が荒くなる困った娘でもある。そして別名『愛すべき馬鹿』である。

「朝から馬鹿馬鹿しい会話しないでくれるかしらせっかくのお兄様の朝ごはんが不味くなってしまいわ。それにお兄様は胸なんかで女性を選んだりしないわ。だってお兄様はこの私を愛してくれているのだから。」

「まあ愛してはいるけどあくまでも兄妹としてね。」

「わかっているわお兄様。兄妹としての禁断の関係を私と望んでいるのは。でも焦ったらだめよお兄様。私はじめてはコスプレして自宅でって決めているのよ。」

「こいつは駄目だな。」

この何事もないように危険極まりない発言をしまくっているのはノワール。女神化した時の名前はブラックハート。別名『ムツツリスケベ』。

「今私の中にお兄様が作った食事が食道を介して胃に落ちていくのがわかりますわ。だけどその食事の中には媚薬が入っていて私を発情させたお兄様そして私をきゅー!!!」

「もっと危険なのがここにいたよ。」

この悶えているのはベール。女神化した時の名前はグリーンハート。またの名を『歩く妄想発生器』。

「因みにユウは限界お兄ちゃんなんていう別名が存在します。」

「イストワール俺の別名は内緒にしておくようにっていったよね？」

今俺の別名を暴露したのは合法ロリ事史書イストワール。ただの変態である。

「ちなみにユウの好きな胸は揉みごたえのある胸です。」

「「「よし、勝った！！！」」」」

勢いよく立ち上がりガッツポーズをとる妹達。

「いやいや待ちなさいよ。あんた達お兄様今私の胸が好きって言ったわよね。」

「いや言っていないし。どう見てもイストワールがいったよね？」

「てめえ言わせておけばいい気になりやがって！！お兄様はな、ちっちゃい女の子が大好きでたまらない変態なんだよ！！！」

互いの襟首を握りしめてにらみ合う二人。どこのヤンキーだよ。

「いや、ちょっと待てブラン。俺はロリコンではないから！！」

「良い度胸ですわね。新妻の前で人の旦那を奪おうとするなんてこの泥棒猫達！！」

「お前の妄想の中では一体俺はどうなっているのかなベールさん。」

何故か両手に箸を持って構えるベール。何やっても絵になるなこの妄想発生器は。妬ましい。

「お兄様私納豆嫌いだから残していいかな？」

器に入った納豆を俺の前に突きだすネプテューヌ。

「食べないと立派な女神になれないよネプテューヌ。」

「ならなくてもいいもん。お兄様に永久就職するから。」

「なら間接的にこいつらに叔母さん呼ばわりされる事になるよ。」

「それでも私はお兄様がほしい！！」

「ネプテューヌ貴女お兄様に愛の告白だなんて！！」

「良い度胸してんじゃねえかよ！！！！」

「今日という今日は決着をつけてあげますわ。」

最早手が付けられない妹達。だが俺にはそんなこいつらを黙らせる魔法の言葉がある。

「お前達もしも喧嘩したらおやつ抜き。」

「「「「！？」」」」」

「それは酷ではないですかユウ？」

「いや別におやつ位なら別にいいんじゃないかな？」

「あれを見てもそう言えますか？」

「ごめんなさいお兄様。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」

虚ろな目で誰もいない空間に謝り続けるネプテューヌ。

「お願い許してお兄様。何でもしますから許してください。」

膝を付きこちらを涙目で見つめるノワール。手は常に十字を切っていた。

「もう妄想なんてしませんからどうかおやつ抜きだけはお許しくださいお兄様。」

妄想がなくなったらお前に何が残る？

「ううつ、ぐすつうわああああああん！！お兄様の馬鹿あ！ロリコン！チビ！サディスト！シスコン！」

それ以上言ったら怒るよ。

「どうですか？」

「何とかしてイストワール。」

「しょうがないですね。皆さんここにユウがベッドの下隠していた

雑誌があります！！その名も『巫女大全集』！！」

イラストワールが掲げた雑誌。あれは月に一度販売される巫女好きの
為の巫女好きによる雑誌。定価680円。

「馬鹿な完璧に隠していたはずなのに！！」

ベッドの下に張り付けて光学迷彩で見えなくしていたというのに……。

「まさかお兄様があんな低俗な雑誌を見るなんて……いやこれは違うわ……。これはお兄様のサイン。」

巫女さんのコスプレをしてほしいという遠回しの願い！！」

「巫女服なんてあったかなあ？」

「いや寧ろここは全裸で攻めるべきですわね。」

「馬鹿ね。巫女服はある程度着崩す位がちょうどいいのよ。神聖な巫女がエロを醸し出す。まさにギャップ萌えよ。」

「とりあえず今の内に逃げよう。」

「それでユウ。この本はどういう事ですか？」

残念俺は逃げられなかった。イラストワールによって行く手を阻まれてしまった。

「そうねお兄様私達の誰かにカテゴライズされているならまだ我慢
もできるわ。」

「でもこの中に、いいえ。」

「ゲームギョウ界の主要キャラの中でも巫女なんていないよね。」

「……これはお仕置きね。イストワールライターを出しなさい。」

「どうぞ。」

「待てよ。お前等何をするつもりだ!？」

「何をつて…………。」

「」「燃やす。」「」

「やめろおおおおおおおおお!!」

無情にも燃え尽きる我が巫女さん達。

これは俺の黒歴史の一つである。

朝ごはんと巫女さん達の火炙りが済んだ俺は食器を洗い、洗濯物を洗濯機にかける。

そして居間に掃除機をかけようとした時であった。

「やあユウ君せいが出るね。それとお煎餅頂いているよ。」

掃除機の進行方向にノンビリとソファーに腰かけた5pb.ちゃん
がいた。ちなみに彼女が食べてやがる煎餅は俺がストックしていた
物である。

「5pb. ちゃん一体どうやっていつもいつも天界に現れるの?」

「ロッククライミングと言っておくよ。」

5pb. ちゃん。ゲームギョウ界のストリートミュージシャン。その歌は世界を震わせ地震を起こす。そしてその歌は人々の理性の枷を外してしまう。さらにその歌は地殻変動を……とりあえず彼女は凄惨な奴。普通の人間が天界に辿り着く事はあり得ないと言っておきましょう。

「聞くだけ無駄か。悪いんだけどそこ退いてくれるかな? 掃除機がかけられない。」

「いいけどボクの下着の色をあてたらね。」

「お前何言ってるの!?!」

「当てられなかったらボクの全力を持ってユウ君の全てを奪いとるよ。」

「…………じゃあ青。」

「流石だね。正解。約束通りボクは脱ぐよ。」

「お前いい加減にしろよ!?!」

「大丈夫だよ。ボクの全力をもってユウ君をへブンさせてあげるよ。」

「言っている事の殆どが理解できないんだけど…。5pb.ちゃん
の存在自体が俺の存亡を揺るがしているからね。」

「こうなれば力強くで!!！」

「何で俺が脱がされなきゃいけないの!? っていうか離してよ！」

何故か5pb.ちゃんによって脱がされようとしている俺。だが俺
も女神の一人だそう簡単に脱がされたりなんてしない!!

「……あり得ないわ。」

そしてその光景をポテチをかじって闊歩していたノワールに見られ
てしまった。これすなわちさらなる火種なり。

「あり得ないわー!!！」

走り去るノワール。縮まる俺の寿命。加速する時。崩壊フラグが乱
立の天界。

「までノワールお前今重大なる間違えを!!！」

「行っちゃったね。パリン。」

「まだ洗濯物だって干してないのに。」
何どうでもよさそうに煎餅食ってやがるこのアイドルは……!! お前
が変わりに洗濯してくれるのか!?

「そんな泣きそうな顔しないでよ。……しかたないね、ここはボクがああ四女神様を足止めしておくから買い物にでも行ってきたら？」

「倒してもかまわないからね。」

「ボクに死亡フラグは効かないよ。言葉通りに受け取らせてもらおうよ。」

「よし、それならちょうどプラネテューヌのスーパーがお昼のタイムサービスの時間だったけ。よし安いのでいっぱい買うぞ!!」

「ユウ君は絶対良いお嫁さんになるよね。パリン。」

俺は男だ。そして妹達が自立してくれるまでは結婚なんて出来るわけがない。

タイムサービス。それは主婦及び主夫達の戦場。

タイムサービスそれは普段では手に入らない高嶺の品物を安くで手に入れる事ができる庶民の味方。タイムサービスそしてそれは家族の笑顔の為に闘う物達が集まる聖地。

「なんていう気迫だ。やはり卵パック50円の効果はすさまじいんだね。」

「あらユウちゃんじゃない。」

「あらほんと。女神様もタイムサービスは見逃せなかったのかしら？」

「家族が家で待ってますから。」

「本当にいい娘ね家の息子の嫁に欲しいわね。」

「そんな事したら息子さん蒸発しますよ。文字通り。」

「それにユウちゃんは私の嫁だよ。」

「REDちゃん？こんなところで何やってるの？」

タイムサービスでよく会うおばさんAさんとBさんと会話をしているとロイヤルエンペラードラゴンのREDちゃんがこのスーパーの制服を着て現れる。

「あ、私ここでバイトしてるんだ。正確にはこのスーパーの助っ人だよ。最近売り上げが減っているから助けてくれと言われてね。」

ロイヤルエンペラードラゴン事REDちゃんはどんなに経営状況が悪いスーパーマーケットでも3日もあれば立て直してしまう凄いロイヤルエンペラードラゴンなのである。

「通りで最近このお客が増えているわけか。」

「ユウちゃんはお買い物？」

「タイムサービスがあるらしいからね。」

「あ、あれに参加するなんてユウちゃんはチャレンジだね。ロイヤルエンペラードラゴンの私でもあれに参加するのは無理だよ。」

「まあ毎回怪我人続出だもんね。」

「じゃあ私は仕事に戻るよ。がんばってねユウちゃん。」

「うんわかった。さあ振り切るぜ。」

俺はREDちゃんの声援を背に零刹那を鞘にしまった状態で構える。

『お待たせしました。これより毎度お馴染みのタイムサービスを開始します。さあ主婦よ主夫達よ闘わなければ生き残れない!!!』

「始まったか。絶望（品切れ）がお前達のゴールだあああああああああ!!!」

その後俺は阿修羅さえも凌駕する主婦及び主夫達を切り払い、殴り飛ばしてお一人様3パックまでの卵を3パックちょうど手に入れてレジに並ぼうとしていた。その時Sギア（銀色の折り畳み式の携帯電話）が誰かから着信を伝える為に着うたを奏でる。

「はい、もしもし。」

『やあボクだよ。』

「……………誰？」

『君が愛してやまない人だよ。』

「霊○さん!？」

ど、どうしよう。緊張してきたよ。お賽銭あげなくてはいけないのかな？

『その通り5pb. ちゃんだよ。』

「……………間違い電話です。」

『ごめんごめん。それより今どこにいるの？』

「……………プラネテューヌのスーパー『戦場』だけど。」

『悪いんだけどついでお菓子買ってきてもらっていいかな？』

「確か一週間分は買い込んでいたはずなんだけど？」

『女神様相手にしたからちょっとお腹が空いてね。悪いんだけどよろしくね。』

「まさか…!?!？」

『ちょっと危なかったけど全員倒しておいたから。』

『……………ブランが負けたんじゃないホワイトハートがまけたの。』

ブランの意味不明な発言を聞かされた瞬間に俺は通話をやめました。

「……………とりあえず帰るか。お菓子買ったら赤字決定だよ。またバイトしないといけないかな？」

スーパーで買い物を終えた俺はスーパーより徒歩三分の公園のベンチでぼーっと座っていた。

「花火か。買って帰ったら天界は大火事決定だよね。」

公園より見える高層ビルには株式会社花火と爆発の『日本一』と書いていた。

ネプテューヌ達が花火をすると必ず火事になるからいやなんだよね。

「がすがす。」

ふと買った品物を入れてあったレジ袋がガサガサと動いた為に見るとそこにはレジ袋に顔をつっこんでいる。ホームレス（ガスト）がいた。

「……ちょっと待てよ。」

「がすがす。お久しぶりですのお師匠。がすがす。」

この人はホームレス（ガスト）この公園に食べ物を持って訪れると90%の確率で現れる厄介極まりない存在である。以前食べられる野草を教えて以降師匠と呼ばれる様になってしまった。

「誰が師匠だ！？そして何勝手に人様のお菓子食べてやがる。ほらやめなさい。」

「やめるから金寄越せよですの。」

「お前本当に何言ってるの!？」

「世の中金ですの。師匠と金は切っても離せないですの。」

「お前は一回自給自足の暮らしを経験してみろ。とりあえずこれで菓子でも買いなさい。」

「話がわかるですの師匠。」

俺が500クレジットを渡すと颯爽と消えていった。彼女にも良い就職先を見つけてあげないと駄目なのだろうか？

「最近ゲームギョウ界の平和が保たれているのは良い事なんだけど少し暇すぎるのがネックなんだよねー。」

ベンチに腰を掛けて公園で羽休みをしていた黒龍に先ほどスーパーで買ったパンを千切って与えてながらこれからのゲームギョウ界について考えていた。

すると公園の端に白をモチーフとした献血車が佇んでいる事に気付く。あまり人は集まっていないようである。

「献血をお願いしますー。」

白い看護服に身を包む一人の少女。名前は確か…。

「あれはコンパさん相変わらずがんばっているなあ。」

コンパさんはよくネプテューヌと一緒に遊んでいた三人組の一人である。ネプテューヌともう一人、アイエフさんに色々と引っ張り回

されて巻き込まれていたなあ。

「そう言えばアイエフさんはリーンボックスで家電製品を販売する大型電気店の店長だっけ。かつての悪ガキ三人組もそれぞれの道を進みだしたか。早くネプテューヌにも就活させないとね。」

何やら懐かしさを感じながらも俺は公園を後にして天界へと転移した。

「ただいまー。今帰ったよー。……何この惨状。」

現在の天界の惨状は半分が瓦礫の山。いやもう瓦礫の山。至るところに火の手が回っている始末。

「申し訳ありませんお兄様。5pb.さんが花火を持ってきてくれたものですから。つい……。」

あちこちが黒く煤けているボールが頭をアフロヘアにして俺の前に土下座。

「わ、私は止めたわよ。」

全身でブラックハートを体現しているノワール。彼女も同様にアフロヘアで土下座

「…貴女が一番フィーバーしていたじゃない。」

ホワイトなんて似つかわしくない状態のブラン。

「お前達…!!」

「ねぷ！？お兄様どうして女神化するの!？」

ちなみにネプテューヌは何故か無傷だった。

「言わないとわからないか？」

「「「ごめんなさいiiiiiiiiiiii!!」」」

「許すわけないだろうがああああああああ!!」

その後妹達にお仕置きをした。そして半分程炎上していた天界を再生させるとついでに半分程燃え尽きていたイストワールを再生させた。

「なんで一日でこんなに疲れないといけないんだよ。」

「それがお兄様だからよ。」

「それで納得できる自分が嫌だ。」

お昼からすき焼きという贅沢をしながら俺は自分の運のなさをなげいていました。

「おい！ネプテューヌてめえそれは私の肉だ返しやがれええええええ!!!!」

「全ての肉は私の物なのだよー。っていうか私お野菜食べられないんだよね。」

「それならこのお野菜達をお兄様だと想って食べればいいのですわ。」

この椎茸はお兄様。ああお兄様が私の中にiiiiiiiiiiii! ! ! ! !」

「やめろ。品位が疑われる。」

「やだあ。お兄様のお肉が私の中に……。これ、凄いよ。」

「お前もやるなよ! やるならせめて野菜でやれよ。」

「野菜なんて草だよー。そのせいか口の中が口内炎だらけなんだよね。」

「謝れ農家の人達に謝れよ! そして口内炎はビタミン不足だよ! !」

「ボクは野菜も食べれるよ。」

「お願いだから気配もなく現れるのは止めてくれる5pb.ちゃん?」

いつからいたのか5pb. ちゃんは俺の隣でもの凄いスピードで箸を動かして肉達を捕縛していた。

「それはボクに音楽を止めろと言うのと一緒にだからね。」

「何でもいいけどこの野菜食べてよ。」

「別にいいよ。」

「家の妹を甘やかさないでくれるかな?」

「パープルハート様食べないともぐよ。」

「うわぁこの白菜美味しそう。いただきます（棒読み）。」

「随分素直だけど一体俺がない間に何があった？」

「お兄様にとって巫女服が目の前で引き裂かれるような事をされたのよ。」

「よくお前等生きていたな。」

「そう思うならお兄様が大事にキープしているお肉を頂戴。」

「ひとときだけだからな。」

「……愛してるわお兄様。」

「待てよブラン何で肉を全部持っていく!？」

「ならお兄様私のお肉をどうぞ。」

「ありがとうベール。はむはむ。」

「私のお肉がお兄様の中にiiiiiiiiiiii! 私お兄様に食べられちゃいますわー!!」

「……それで5pb.ちゃんいつまでいるの?」

「すき焼き食べきるまで。」

「……お兄様お肉がない。」

「10人前は入れていた筈なのに…。」

「私まだ3きれしか食べられてないわ。」

「俺は2きれ。」

「流石に肉はもうないから締めうどん投入だああ!!」

「「「「やふうううううう!!」」」」」

締めのうどんはすき焼きの醍醐味なのである。

この世界、こいつ等の事は嫌いではない。だけど…やっぱり思ってしまう。自由に生きてみたいと。そしてそんな思いがあんな事になってしまうなんて今の俺には予想もしてはいませんでした。

次回予告

ユウの前に立つ世界全ての悪アンリマユ。そしてダークネスハート。それを倒す為にユウは再び罪を背負う。

次回 超次元ゲームネプテューヌmk2男の娘だった女神候補生

プロローグ『幼女にはもはや危機感しか感じ得ない』

騙されたなら騙し返せ。

テ〇ルズ風スキット

一人ぼっち

いーすん「皆さんすき焼き美味しそうですね。でも誰か重要な人物の事を忘れていませんか？ユウによって修理された私は何故か鎖でぐるぐるに巻かれて放置されてしまいました。誰か教えてくれませんか？私は何か悪い事をしたのでしょうか？私はただユウのスパッツをかぶっていただけなのに。」

第0話 男の娘な女神様（後書き）

これはシルバーハートの存在を知らない人への説明的なものでした。

プロローグ 『少女には最早危機感しか感じ得ない』（前書き）

ここからシルバーハートの物語は終わりシルバーシスターの物語が始まります

プロローグ 『少女には最早危機感しか感じ得ない』

シルバーハートside

今俺の立っている場所。そこはまるで地獄であった。

いや地獄その物であった。辺りに見えるのは大量に積み重なった死体。辺りにたち込めるのは死体から漂う腐敗臭のみ。地は枯れはて空は血のような赤へと染まる。

生命の息吹きがまったく感じられない場所で俺は対峙していた。

全ての歪みとも言える存在ダークネスハートと……………。

「信じていたわシルバーハート。最期に闘うのは私と貴方であると。」

「ダークネスハートお前はここで倒す。そして全ての人々の想いと共に俺は闘う。」

「ふふふっ、あはははははは！よく言えるわね自らの最愛の妹達を殺しておいて！！」

「確かに俺は自らの過ちに気付く事ができずに妹達を手にかけてしまった。だけど俺は絶望しない。諦めない。このバトルファイトの勝利者となって俺は妹達の想いを、志し半ばで散って言った者達の願いを叶えてみせる。」

「いいわ、貴方に決定的な敗北を与えてその愚かな希望も打ち砕いてあげるわ。」

みんな見ていってくれ。必ずダークネスハートを倒して……………世界を元に戻してみせる。

「sinを全ての罪を開放する俺の身体欲しければ全て持っていけ。顕現せよ七つの大罪!!」

俺は肉体を身体を。全てを身の内に眠る七つの大罪を具現化させて世界を導く女神であって全てを混沌に染める存在。その両方を身に秘めた守護女神sinシルバーハートへとsin女神化を果たす。

「嬉しいわ貴方がそこまでしてくれるなんて。なら私も本気で行くわ。来なさい絶対悪・アンリマユ!!」

ダークネスハートの両手に闇の魔力、絶対悪・アンリマユによって形成された魔力で闇の槍が握られる。そして銀色の悪鬼と化したシルバーハートと世界全ての悪と化したダークネスハートの闘いは開幕する。

そして決着の時が訪れる。

「この一撃にノワールの想いを!! バールの絶望を!! ブランの願いを!! ネプテューヌの愛を!! そしてその身を持って俺に進むべき未来を教えてください! ストワールの希望を込める悪鬼絶牙白夜アアアアアアア―!!」

俺はその身の全てを持って最大の魔力をシェアブレイカーに籠める。そして最強の一撃をダークネスハートに叩き込む。たとえこの身がsin（罪）に喰らいつくされようとも。

「凄い、凄いよシルバーハート!! なら私も世界の歪んだ願いを!

！全ての悪意を私に集まれそしてシルバーハートの希望を打ち砕け
！！ダークインパルス！！」

ダークネスハートが両手に握られた槍を一つに連結させて投擲の構えをする。

今世界の罪と世界の絶望がぶつかるそして……………。

「良かったわねシルバーハートこれでこのバトルファイトの勝利者は貴方よ。」

「どうして抵抗しなかった!?」

ダークネスハートは槍を投擲はしなかったそれどころか俺の一撃を受けて身体が二つに別れている始末。

「バトルファイトの勝利者には特典が与えられるのよ。勝利者は次のバトルファイトで奏者の資格を得る事が出来る。」

「次のバトルファイトだ?!? どういう事だ!! バトルファイトは終わったんじゃないのか!?!」

「バトルファイトは繰り返し返される。そして奏者の資格を得た者は全ての記憶を消されて新たな役割を与えられる。私の目的は貴方を奏者にする事だったの。ふふふっ、貴方は最初から私の手の平で踊らされていたのよ!!」

「詳しい説明を……………!?!?」

俺は七つの大罪によって喰らいつくされた身体を引きづりながらも上半身と下半身が二つに別れたダークネスハートに詰め寄ろうとするが自らの身体が光の粒子となっていくのに驚き足を止める。

「これはまさか本当に……………」

「さよならシルバーハートまた会いましょうね。そしてまた愛し（殺し）合いましょうね……………」

その言葉と共にダークネスハートは息絶える。だが俺にはそんな事を気にしている余裕はなかった。自らの消えていく身体を見ながら戸惑いを隠せずにかつての守護女神の面影はなく、そこには自分のこれからがいたいどうなってしまうのか不安一色にその身を染めた一人の男の娘だけがいた。

「俺はもう思い出せないのかゲームギョウ界のみんなの事を……………そんなの嫌だ。誰か何か言ってよ。」

次第に俺の目には涙が溜まっていく、そして……………。

「「「「興奮してきましたー！！」「」「」」」」

突如そこらへんに転がっていた全ての死体が起き上がり謎の叫び声をあげる。

「はい？」

俺はその光景に頭の中で疑問の嵐が吹き荒れる。いつの間にやら身体の粒子化も止まっていた。

そして死体達がもの凄い勢いで俺に向かってくる。

「「「「悪夢にうなされるシルバーハートちゃん可愛いよー!!」」」」

そして群がってくる死体達そしてその恐怖に俺は絶叫する。

「いやあああああ!!」

夢から覚めたユウside

「やっぱり夢オチですか……。」

そう今まで見ていた光景は夢。誰が何と言おうと夢。騙されたなら騙しかえせ。

「それにしても我ながら意味不明な夢であったよパトラ○シュ。ダイクネスハートって何? しかもネプテューヌ達は死んだのか。」

イストワールよお前は一体俺にその身を持って何を教えてくれたんだ? それにしてもsilverシルバーハートかあ語呂が悪すぎるだろう。……ヤバイ俺自分の夢にまで突っ込み入ってるよ。それにしても嫌な汗をかいたとりあえずシャワーでも浴び………なんでさ。」

シャワーを浴びようとベッドから起きた俺の視界に現実を疑う様な光景が飛び込んでくる。

「世界がぴ、ピンク色になっているだと……………!？」

俺は昨日確かに自分の部屋で眠りについた筈なのだがいつの間にピンク色の夜に迷いこんだのだろうか？

辺りを見渡してみてもただピンク色の空間しかなくいつの間にか先程まで寝ていたベッドまで消失していた。

「これは初めてのパターンだな。さすがの俺も戸惑いをかくせない。」

「あのー。」

不意に俺の服の端が引っ張られる感触と共に女の子が聞こえてくる。直ぐ様振り返った俺ではあったがその事を後悔したのは言うまでもない。

「は、初めまして私貴方の、超次元アイドルシルバーハートちゃんの大ファンなんです！」

そこにはの博○神社の巫女さんとまったく同じ恰好をした10歳前後の女の子が幼女がいた。髪の毛は白くて腰まで伸ばしている超ロングヘアー、瞳は青……………あれ？こんな人何処かみたような。

「あ、わかりますか？これシルバーハートちゃんの真似をして髪の毛は染めて眼球は取り換えてみました。自分では結構イケテると思うんですけど？」

そうだ俺だ！俺に似ていたんだ！

アイドルの真似をしてそういう事をするファンがいると5pb.ちゃんから聞いてはいたけどまさか自分がされる日は……………。

「ところでシルバーハートちゃんにお願いがあるんです！」

「ん？何かな？俺に叶えられる事だったらいんだけど。」

「私を抱いてください。」

その言葉を聞いた瞬間俺は反射的に逃げようと試みる。
だが残念少女に手を掴まれた。

「だ、駄目ですか？」

「流石に初対面の女の子にそんな事は出来ないよ。」

「うう、シルバーハートちゃんはファンの女の子を抱くのが趣味だ
って聞いてたのにー。」

とりあえずその間違えた情報を君に教えた人物を教えてもらいたい。
とりあえず生きていた事を後悔させたいので。

「ならサインください。」

まあそれくらいなら。

俺は少女にペンを手渡される。色紙かなにかないのだろうか？

「とりあえず何処に書けばいいんだ？」

「背中をお願いします。超次元アイドルシルバーハートちゃんより
おーちゃんへって書いてもらっていいですか？」

「か、構わないけど。」

俺は背中を向けた幼女の巫女服の背に言われた通りにサインを書く。

「これでいい？」

「はい、ありがとうございます！帰ったらゼウスちゃんに自慢しちゃおう！」

友達に最高神がいるのか！？いやきつと名前が一緒なだけであろう。
そう信じたい。

「と、ところでこのピンク色の空間は君が何かしたのかな？出来れば
元に戻してほしいんだけど。」

「構いませんよ。」

構わないのか！？意外とあっさりだった。

「でもその前にアンケートを取らせてもらってもいいでしょうか？」

幼女は何処からともなく紙とペンを取り出す。

アンケート、まさか詐欺か紛いのものではないだろうか？

だが幼女はそんな事に気にも止めずアンケートを開始する。

「まず問1男の子と女の子どちらが好きですか？」

「まあ普通に女の子が好きだけど。」

確かに俺の顔はこれだけ変な趣味はないからね。

「では問2貴方はゲームの二周目でレベルと見た目引き継ぐとしたらどちらですか？」

「見た目かな？」

いくら二週目でも最初から強いっていうのはあまり好きではないんだよね。

「問3です。闘いには頼れる相棒は欠かせませんか？」

「出来ればほしい。」

アドバイスとかしてくれるパートナーがいてくれるとありがたいよね。イストワール？あれはただの変態。

「問4です。好きな女性のタイプは？」

「料理が得意な家庭的な普通の女の子がいいかな？」

「そ、そんな私まだ結婚なんて考えていませんよ。まずは交換日記

から始めましょう?」

決して君の事ではない。

「問5これが最後です。家族の絆は例え世界が違ってても断ち切れないと貴方は言えますか?」

「勿論だ。絆とは決して断ち切「これでアンケートは終わりです。最後まで言わせて!!」」

「ではここに名前を書いてください。」

俺は幼女に言われてアンケートの右下にあった名前を記入する欄に名前を書く。普段の俺であったなら書く前に何か違法な事がないか確認するのだがこの時は面倒事から早く開放されたいが為にそんな事は気にしてはいなかった。

「これで終わり?」

「はい。これでシルバーハートちゃんの別世界への移送が決まりました!!」

「what?」

「綺麗な発音ですね!!」

「ありがとう、じゃなくて君今何て言った?」

「それでは別世界に行くにおいて変更された貴方の情報をお知らせしますね。」

駄目だこいつ人の話を聞いてない。別世界に移送とか俺の身体がこの幼女はヤバイと警報を鳴らしている。とりあえずこの空間から脱出しなくては。

「まず貴方の希望通りに力の受け継ぎはせずに、移送する世界に合わせて貴方の力を削減します。」

「な、何を言っ………!?!」

幼女に文句を言おうとするが身体から急激に魔力が消費、いやこれは抜き取られている目の前の幼女に。それと同様に俺の身体から力が抜けて膝を付く。

「それとこの武器は全て預かりますね。」

「な!?! いつの間に!?!」

幼女の手にはいつの間にか俺の身体の中に取り込んでいるセブンスード（魔剣）の全てがあった。

「でもシルバーハートちゃんの武器はやっぱり双剣ですよ。菊壺紋字と零刹那はお返しします。但しこの二つからも力は全て抜き取らせてもらいます。無論連結して使用しても童子切りにはなりません。ただの剣と成り果てています。」

この幼女まさか剣自体から力を抜き取ると思っているのか!?! そんな事が出来るなど普通ではない。いや幼女である事自体が普通ではない!?!

「お前は一体なんなんだ!?!」

俺はふらつきながらも立ち上がり幼女に零刹那の切っ先を向ける。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私の名前は神位3位の次元神オーデイン。気軽にオーちゃんって読んでくださいね。」

「次元神だと！？それにオーデイン、まさかグングニールの。」

「いえまったく関係ないですよ。」

「ないのかよ！！」

「あ、でもロンギヌスならありますよ。」

「なぜお前がもっているんだよ！！」

「では続けて肉体の変換を始めますね。」

人の話を聞けよ！！そして肉体の変換って何！？

そう突っ込みを入れようとした俺であったが突如身体が激痛に襲われて声すら発する事ができなくなてなる。

「ぐっ、が、あぐっ！？」

「身体の変換には激痛が伴いますが我慢してくださいね。」

そういう事は先に言ってもらいたいが、俺はまるで神経その物を剥ぎとられるかの様な痛みに耐える事しか出来ないでいた。

「痛みに耐えてあえぎ声をあげるシルバーハートちゃん何だかとてもそそる物が、よし最近買い直したばかりのハンディカメラで撮影を！！」

この激痛が収まったらこの少女とりあえず殺す。

しばらくお待ちください。

ユウ? side

「身体の変換が終了しましたよ。どんな感じですか？」

「最悪だよ。身体が何か変な感じ。まるで自分の身体じゃないみたい。……………それに何これ身体が縮んでいる!?!。」

一体何がどうなって!?!

「それにしても可愛いすぎますよ。シルバーハートちゃん!! いいえ今はシルバーシスターちゃんと言うべきですね。」

「シルバーシスター?何を言ってるの私はシルバーハートって私! ?何で私!?!」

どうして私は私なんて言ってるの!?!それに何この言葉使いまるで女の子!!

「だって貴女が言ったじゃないですか男の娘より女の子の方が好きだって。だからわざわざ身体を女の子にしたんですよ。」

「ま、まさか!?!」

私は自分の身体をぺたぺたと触って確かめてみる。

「お、女の子になっているだと……………!?!」

「はい、とっても可愛いですよ。基本的な見た目は変わっていませんがちゃんと胸もありますよ。えいっ!!」

突如飛び付いてくる次元神。

「触るな、揉むな!!」

「大丈夫です!! 女の子どうしなんですから。……………慎ましかですがこれはなかなか。」

「いい加減にしてー!!」

必死に身体をじたばたと動かすが次元神、いやもう幼女神を通して行こう。幼女神を振りほどく事ができずにされるがままにされてしまう。何をどうされているかはご想像にお任せします。

再度しばらくお待ちください。

「次元神オーディンとあろう者が取り乱してしまいましたね。」

「もうお婿にいけない。」

「それなら私がもらいますよ。今は女の子だから正確にはお嫁さんですけどね。」

そんな事は知らないが……………。

「詳しく説明をしてもらおうか。」

「今崇高なる神々の間では妹ブーム。そして簡単に言わせてもらえば今の貴女は女の子で女神候補生のシルバーシスターちゃん。私の

妹で嫁です。」

……余計に分からなくなったんだけど。

「最初のアンケートに答えてもらいましたよね。あれの通りに貴女
の能力及び肉体を変化させたのです。別世界に行ってもらおう為に。」

あれで……………。

「ちゃんと最初に説明してよ!!」

「だって説明したらアンケート受けてくれなかったですよ?」

「当たり前だよ。とりあえず早く元に戻して。」

「ごめんなさい。無理です!! っていうかしたくないです!!」

直ぐ様頭を下げて詫びをいれる幼女神。だが顔が凄くニコニコして
いる。絶対に反省してないよねこの幼女。

「とりあえず今の貴女はシルバーハートちゃんの時程の力はないで
すからね。」

「そうなのか。って違う!! 何故だ何故戻せないの!!」

「だって戻すには最高神であるゼウスちゃんの許可がいるし。ゼ
ウスちゃん百合っ娘だから絶対に無理だもん。」

そんな風に言ったところで今の私にはウザイだけ。それよりゼウス
貴方は何なんの!? もう私意味がわからない!!

「そうだ貴女はに紹介したい娘がいるんだファイブスちゃん出番だよー。」

幼女神が巫女服の懷から一枚のディスクらしき物を取り出すと地面に叩きつけるかの如く投げつける。てっきりディスクは粉々になるかと思われたが突如発光する。そして光が止むと光の中から一人の女の子が現れる。赤紫のストレートの髪を持ち、瞳は青く輝き明確なる強い意思を感じ取れる。

「彼女は人型ゲームキャラのファイブス・ディスクちゃん。貴女のパートナーになる娘だよ。」

「以後よろしくお願いしますマスター。それと私の事はファイと呼んでください」

幼女神の紹介を受けたファイブス・ディスクはまるで臣下の礼の様に膝を付く。良かった。どうやらある程度は普通の娘みたいだ。イストワールらしき者だったらどうしようかと思った。

「私の事はマスターなんて呼ばなくていいよファイブスさん。」

マスターとか堅苦しいのは嫌だからね。

「わかりました。舌を噛みきります。」

この世界に神はいない。……いや一応目の前にいるのか。

「どうしてそうなるの!？」

「マスターをマスターと呼べなくなるくらいなら、そしてファイと呼んでくだらないのなら舌を噛みきります。」

やっぱり普通じゃなかった。

「それではマスター舌を出してください。噛みきりますので。」

「私のを噛みきるの!？」

「だって私痛いの嫌ですし、そしてどさくさに紛れてベロチューしようかと……………」

「よろしくねファイ。気軽にマスターって呼んでね？」

「しかたありませんマスターの頼みならそうしましょう。」
怒こったらきつと負けなんだろう。

「ところでゲームキャラって何？」

私はファイに問いかける。

「何なんですか？」

ファイは幼女神に問いかける？

「何なのかなあ？」

幼女神は俺に問いかける。

「さあ？って二人が知らない事を私が知る訳がないでしょう！？」
こいつ等私をからかっているのか！？」

「マスターって弄りがいがありますね。」

「ファイブスちゃんに本人の前では言ったら駄目だよ。確かに弄りがいがありますけど。」

「落ち着け私、怒ったら負けだ。クール、クール。」

怒ったらこういう奴等は付け上がるに決まっている。

「結局ゲームキャラって何？」

「「……………」」

本当に知らないのかよ！！

「とりあえず話もまとまったところで別世界に送るね？」

「何処がどう纏まったの？」

「マスターそこは空気読まないとKYKKって言われますよ。」

Kが明らかに多い気がする。

「因みに意味はK・空気Y・読めないK・けれどもK・可愛いよ、という事です。」

「……………突っ込むだけ無駄みたいだね。」

何かを悟った気がする。

「次元神の中でも優しいおーちゃんが簡潔に纏めましょう。シルバーハートちゃんは別世界への移送をかけたアンケートを私に騙されて無理矢理やらされて、アンケートの解答結果によって力の殆どを奪われてシルバーシスターちゃんに劣化しちゃったわけです。そして今まさに別世界へと新たな相棒であるファイブスちゃんと共に旅立つ事になりました。」

それで上手くまとめたつもりか？

「まあいい。この姿で元の世界に戻ればどんな恐ろしい目に合うか予想はつく、ならばいっそのこと別世界で別の人物として生きるのも悪くないかもしれないね。寧ろこの世界から開放されたい。」

「開き直りましたねマスター。」

「開き直ったね、シーちゃん。」

「別に開き直ったわけではないよ。それとシーちゃん言うな。まあ別世界に行くのは構わないんだけど一つ問題があるんだけど……………」

「…。」

「問題？何かな？」

「ああマスターと一心同体の私にはわかりますよ。…………エッチな事ですね。」

「ふ、ふええっ!?!」

「違うよ!!断じて違うからね!!」

「分かってますよ。単なるジョークですよ。」

「な、何だ期待して損したよ。それで問題って何なの?」

「…………妹達だ。」

「「ああ、あの変態女神達。」」

何故そこでハモる、そして何故知っている。

「…………私が居なくなったら確実にあいつら+αが世界を崩壊させかねない。」

「それなら大丈夫ですよ。私が何とかします。」

「何とかするってお前がか?無理だろう。」

「いえ、大丈夫だと思いますよ。このクソ幼女見た目これですけど全盛期のマスターの三倍強いですよ。」

「これがか？」

「キラッ☆」

「ええこれですよ。」

「キャハッ☆ってたいた!？」

「「黙りなさい。」」

とりあえず頭を殴っておいた。

「ごめんなさい。でも私本当に強いんですよ。えいっ!!」

何故抱き付く。……………って。

「痛い、ちょ、洒落にならないくらい痛い!!腰がくだけるから!!お前の強さはわかっただから離れて!!」

「えへへシーちゃん良い匂いー。」

駄目だこの幼女神早く何とかしないと。

「ファイ何とかして！」

「……………え？」

そこで何故私に頼むんですか？って本当に不思議な顔しないでくれませんか！！

「むぎゅー！！」

『ゴキンツ☆』

やばい何か砕けた。

再再度お待ちください。

「それでは初回特典としてユウちゃんの服をチェンジ！！」

「意外とまともなのか？スカートはいただけないけど。とりあえず初回特典って何？」

私の服装は「ユーちゃんですよ。」

「いやそれはそうだけど。」

「違うよユウちゃんはユウちゃん。そしてその姿はユーちゃんのコスプレ。だけど性能はピカ1だよ。」

今の服装は服の上から腕にガントレットとプレートアーマーを装着するという奇抜なファッション。そして自分がミニスカートを穿く事に戸惑いを隠せないでいた。

「あれはゾンビですか？」

「いいえ女神候補生です。」

こいつら何なんだろうか？

「無論ネクロマンサーの力も付属するよ。死んでから一時間以内の人なら復活可能だからね。」

「理解が追い付かないよ。」

「考えるな。感じろですよマスター。」
それは何か違う気がするよ

「それでは今から別世界へ移送しますからね。」

「随分と唐突。そしてここまで来るのに一体何ページかかったことか。」

「マスター、メタ発言は駄目ですよ。」言わなきゃやってられないよ。

ところでメタ発言ってどういう意味だろうか？

「もう！！無視しないでよー。」

「「……ウザすぎる。」」

ピョンピョン跳ねるな本当に血管が切れそうだ。

「シーちゃん、とりあえず何かあったら直ぐにお姉ちゃんに連絡するんだよ。」

誰がお姉ちゃんだ。

「それとはいこれ友達から死ぬまで借りてきた夜笠。」

幼女神から渡されたのは黒いコート。夜笠って友達に炎〇灼眼の〇ち手でもいるのか！？

「因みに、名前はシャ〇たん。」

そっちな！？

「中にいっぱいお助けアイテム入れてあるからね。」

投げ捨てたら駄目だろうか？

「捨てたら発情するからね。」

こいついずれ殺す。

「それでは良き旅をー。落とし穴オープン!!」

「しまった! 怒りに捕らわれて、ってまじで落とし穴ー!!」

「マスターこれが所謂お約束ってやつですね。私また一つ学習しました。」そんな事学習しなくていい。

幼女神によって落とし穴に落とされた私はどうやらこのまま別世界へと行ってしまうようである。

そういえば……。

「私って何の世界にいくのかな？」

「……………さあ？」

とりあえず前途多難の様である。

神位第三位の次元神オーデインによって別世界へと飛ばされたシルバースター。辿り着いた場所は世界の墓場。そこで出会うのは一人の女神候補生。

次回 男の娘だった女神候補生

第1話 通りすがりの女神候補生。

全てを破壊し全てを繋げ。

プロローグ 『少女には最早危機感しか感じ得ない』 (後書き)

現在のユウの状態

身体能力 足の速さ以外は全て劣化

魔力等も全て劣化

使用できる魔法も低級の物のみ。

見た目も幼くなっている。

主人公及びオリキャラの紹介（前書き）

題名の通りです。追加予定あり。

主人公及びオリキャラの紹介

・ユー

性別 男の娘だった女の子

CV（妄想） 月宮みどり

身長 146cm

体重 38kg

B 慎ましかWとりあえず細いHご想像にお任せします。

見た目はこれはゾンビですかのユークリウッド・ヘルサイズそのもの。ただし髪の色は白で長さは腰に届く位。瞳は青い。

服装もこれはゾンビですかのユークリウッド・ヘルサイズその物。ガントレットやプレートアーマーも標準装備。その上からさらにオーデインよりもらった夜笠を羽織っている。ミニスカートの下にはスパッツ着用。

使用武器 菊壺紋字（菊壺紋字は液体金属で出来ていてその形状を斬艦刀に変える事が可能。その際の名は斬艦刀・菊。）、零刹那という双剣。色は二つ共に銀色。二つの剣を連結して大太刀として使うこともできる。（本来は真打童子切安綱という妖刀であった。だがオーデインによって童子切り本来の力は失われている。

）

・マジエコンヌを倒して平和になった無印のゲームギョウ界より超次元ゲームネプテューヌmk2のゲームギョウ界に次元神オーディンによって送り込まれた。オーディンによって性別が強制的に女の子に変えられた。

見た目も少し幼くなっている。呼び出された場所であるギョウカイ墓場でネプギアに出会う。丁度その時ネプギアとジャッジ・ザ・ハードの闘いの真っ最中でそこに介入して通りすがりの女神候補生のシルバーシスターと名乗ってしまい、以後その名を貫く。面倒事に巻き込まれやすい性質になっているのは変わらず。そして何故か軽度の方向音痴になっている。炊事洗濯などが得意などの家庭的な面もある。お菓子なんかを作って食べるのが好きだがネプギア達によく強奪され食べられてしまう。

お化け等のホラー系が苦手。最初からレベルが高めでネプギアを助ける為にギョウカイ墓場で闘った際はジャッジ・ザ・ハードと相討ちではあったが互角に渡り合う。双剣を使い手数で攻める。

その為APがかなり高め。だが攻撃力は低め。スピードはアイエフを凌駕する。

・女神候補生 シルバーシスター

髪の毛は白から銀色に変わる。瞳の色は青から金色へと変わる。何故かクーデレっぽくなる。

プロセッサユニット ・シルバmk2

ユウが以前使っていたプロセッサユニットの劣化版。名前にはmk2とあるが性能は以前のゲームギョウ界で使っていたものより性能は落ちる。だがネプギア達のプロセッサユニットと同等の性能を持つ。見た目はユニが使用するプロセッサユニットクレイドルの色違いで銀色。そして胸の部分に変身前のプレートアーマーを腕にはとガントレットを装備している。レオタード状ではなくスパッツ状。

そして何故か夜笠を羽織る。
スキル

・見よう見まね燕返し

某アニメの佐々木さんの燕返しをその名の通りに見よう見まねでやったらできた技。一度の剣撃で三度の斬撃を放つ。

騎乗スキル『S』

その名の通りにありとあらゆる乗り物を操る事ができる。モンスターでも。

方向音痴スキル『D』

その名の通り経度の方向音痴起こすスキル。現在は軽度だが発展する可能性もあるとの事。

ねくろまんさー

死んでから一時間以内の生物をゾンビとして蘇らせる能力。

ファイ

妄想CV 広橋涼

正式名称ファイブス・ディスク

見た目はデモンベインに出てくるエセルトレーダ。服装も同様に。

オーデインよりユウに託された人型のゲームキャラ。ユウの事をマスターと呼び慕う。

だがユウをからかってその反応を楽しむのが趣味。マスターであるユウと自分の事以外は気にも止めていない。何故か教祖イストワールとは仲が良い。ユウの作ったお菓子や料理を食べる事が好きでそれ以外はたべない。

戦闘では常にユウのサポートに徹して他の誰にもユウとのカップリングを許さない。炎系統の魔法を使用する。

ユウのサポートを行う事によってユウの低い攻撃力と防御力をあげる。魔法によってユウの剣に炎を宿す事もできる。単体で戦闘を行う事も可能。典型的な遠距離魔法タイプ。接近戦は大の苦手。ユウの頼れるパートナー。

スキル

・ふぁいあ

対象にに向かって炎をぶつける低級魔法。

・ふぁいあすとーむ

対象を炎の渦に閉じ込める中級魔法。

・ぎがんとふぁいあ

対象を最大出力の炎で焼き付くす。

ふぁいの加護

ユウ限定

ユウの剣に炎を宿らせる攻撃力をあげる。ユウ以外の人物に使うとスキルを封じる。

ふぁいの癒し

ユウ限定

ユウの傷を癒す。それ以外の人物に使うとダメージを与える。

神位第三位 次元神オーデイン

愛称 おーちゃん

妄想CV 新名彩乃

見た目は11eyesのリゼット・ヴェルトールを少し幼くした感じ。

服装は博○神社の巫女服。

ユウを騙してシルバーシスターに劣化させて別世界のゲームギョウ界に送りこんだ張本人。

その実力はシルバーハートだった頃のユウの三倍だそうだ。 自称ユウの大ファンで涼しい顔してセクハラ紛いの事をする（ユウにのみ）。

次元と次元を行き来する力を持っている。

神位第一位 ザ・ゼウス

妄想CV 新名彩乃

見た目は11eyesのリーゼロッテ・ヴェルクマイスター。

神位第三位のオーデインとは双子の姉妹でゼウスが姉。

彼女もまた自称ユウの大ファン。

実はユウを性転換させて別世界へ送るのを考えたのは彼女である。
その理由はゼウスは超百合っ娘であり初めてユウを見た時ユウこそ
が自分の運命の相手であると考えたが男の娘である事実を知ってし
まい、絶望してしまう。だが彼女は考えた男の娘なら女の子にして
しまえばいいと。

見た目や言動とはちがい中身は純情な女の子。よくオーデインに卑
猥な事を言われたりすると鼻から愛を吹き出して失神するほど。

実力は未知数。

主人公及びオリキャラの紹介（後書き）

うーむ。解りづらいかもしれない。何か質問があったらご自由にお願ひします。

第一話『通りすがりの女神候補生』（前書き）

ストックを全て投稿する勢いで行ってみようかと。

第一話『通りすがりの女神候補生』

ユウside

幼女神によって別世界へと飛ばされた私はとりあえず現実逃避をしていました。

「きっとこれは夢に違いない。目が覚めたら元の世界にいるに違いない。」

「マスター紛いもなくこれは現実ですよ。そして今のマスターは女の子、しかもかなりの美少女。」

「……………お願いだからそれを言わないで。」

「別に元々女の子みたいな顔をしているんだからいいじゃないですか。」

「よくないから!!……………なんとかして男に戻らなくては。」

「無理だと思いますが。」

「それはどういう事だ?」

「マスターの性別を変えたのはあの幼女神です。元に戻すにはあの幼女神に再び会わなくては行けませんよ。」

「……………あれにか。」

「会いたいですか?」

「遠慮しておくよ。」

「それが懸命です。」

「まあきつとそのうち何とかなるだろう。とりあえず今自分の置かれている現状を把握しておこう。」

私は辺りを見渡してみる。

「何やら空は赤い。そして辺りにはゴミらしき物がいっぱいあるけど。……ここはどこだー！！やばいよ自分の置かれている状況すら把握出来ていないよ私！どうしようファイ。」

「困っているマスターも可愛いです。そしてそんなマスターに私は幼女神に渡された夜笠を調べるべきとお知らせします。」

「夜笠、確かあの幼女神が中にお助けアイテムが入っていると言っていたな。どれどれ。」

私は夜笠の中に手を入れて中を探る。

「……………何か掴んだ。」

「マスターそのまま引っ張って！！引っ張って！！」

「よしこの現状を把握する事ができるお助けアイテム出てこーい！！」

私は掴んだアイテムを力いっぱい引き抜く。

「これは本？」

私を取り出したアイテムは赤い本であった。表紙には『神位第三位
オーデインの全て（初心者編）』とツツコミどころ満載の本であっ
た。

「あいつは何がしたかったの？」

「脚本家（幼女神）の悪意を感じますね。とりあえず燃やしまし
うか？」

「そうだね、嫌な予感しかないけど。はいどうぞ。」

私はファイに本を渡す。

「ぼおお。」

「うわあ！？ 口から火が出た！？」

これ忘年会の隠し芸で使えるかもしれない。ファイが口から炎を出
して本を燃やすのを見つめながら私はそんな事を考えていた。

「カッコイイでしょう？」

隠し芸で使えるかもと考えていた事は言えない。

「あ、うん。そうだね。それにしてもここは一体どこなんだろうね
？この夜笠は使い物にならないし、打つ手なしかな？」

「ああもう困ったマスター萌え萌えです。しかたありません私は優
しいですから教えてあげます。ここはギョウ界墓場です。」

「ギョウ界墓場？ギョウ界墓場って何？ファイは何か知ってるの？」
「尺取り虫以下の使い道のない雑種が行き着く墓場です。まあマスターと私には縁も所縁もない場所ですよ。」

「さらに分からなくなったよ。」

「何ですか、もー。」

それはこちらの台詞なのなのだが……………。

「ギョウ界墓場それはゲームギョウ界で死んだ者達が辿り着く場所ですよ。」

「……………ちょっと待って！！今ゲームギョウ界って言わなかった！？」

「言いましたけどそれが何か？」

「私って別世界に行ったんじゃないの！？」

「もしかしてマスター知りませんでしたか？ここはマスターがいたゲームギョウ界とは少し違うゲームギョウ界。簡単に言えば並行世界とも言えますね。スパッツな女神とか魔法少女な女神とかいませんからね。」

いたら私の精神は擦りきれているだろうね。

「ところで私はこの世界でどうすればいいのファイ？」

「私に聞かれても困ります。聞くなならあの変態（幼女神）に聞いてください。」

「…………とりあえず辺りを歩いてみようか？」

「無視ですか？スルーですか？現実逃避ですか？だけど私は優しいですから許します。マスター歩くなら手を繋いでください。」

「はいはい。ありがとうファイ。」

アイの手を私は優しく包む様に握る。ファイも同じように握り返してくれる。手を繋ぐっていうのも改めてするとなんだか恥ずかしいな。

「あ、マスター今私の手の暖かさにドキッとしませんでしたか？」

「……………少しだけ。」

「マスターって結構顔に出ますね。」

出てるの！？ついつい顔を触って確認をしてしまう。

「本当にマスターは可愛いですね。」

ユウ&ファイ散策中

「それにしても空は真っ赤、辺りは何やらジャンクっぽい物だらけ衛生面はあまりよろしくなさそうだね。」

「そこは気にするところではないと思いますが……………」

「いやいや結構重要だよ衛生面。……………それにしても一体私はどうなってしまうのであろうか？」

「一つ言える事は私は何があってもマスターの味方です。例えば世界の全てが少女になっても私はマスターの味方です。」

「世界の全てが少女にはならないと思うけど一応ありが……………!？」

ファイにお礼を言おうとしたその時だった。地面が軽く揺れる程の衝撃が辺りを襲う。

「今の衝撃は……………」

「結構近いですね。さほどここから遠くはないですね。」

「金属がぶつかり合う音。たぶん誰かが戦っているんだろうね。」

「行くんですか？」

「まあね。もしかしたら誰かがいるかもしれないだろし、うまく行けば話を聞けるかもしれないからね。」

「……………マスターに友好的な人がいるとは限りませんよ。もしかしたらマスターに危害を加える人達がいるかもしれない。それでも行くんですか？」

「ならここをずっとさまよっているとしても言うのか？私は何もしないでいれる程我慢強くないからね。もし大変な事になった時は「私がお助けしますよ。」……………それなら問題ないね。」

「まったくマスターには苦労させられますね。先が思いやられますね。とりあえず危険になったら無理矢理にでもお持ち帰りしますからね。」

「お持ち帰りはしなくていいけど頼りさせてもらうよファイ。」

なんだかんだ言ってくるけどファイも頼りになるね。どこかの史書とは大違いだよ。

「了解しました。……………確実にマスターの中で私への高感度はうなぎ登りでしょうね。計画通りです。」

「何か言った？」

「いいえ、何も言っていないですよ。さっさといきましょう。」

ユウ&ファイ移動中

戦闘が行われているであろう場所へと向かっていた私とファイであったが着いた場所では恐るべき光景が繰り広げられていた。

「巨人と女の子が戦っている？」

「マスターこれは凄い所にでくわしましたね。あの黒くてでかいのはギョウ界墓場に封印されていた巨神兵であの白くて破廉恥な恰好をしているゴミ虫は巨神兵を鎮める巫女なんですよ。」

「そ、そうなの!？」

「勿論嘘ですよ。あのデカイのは知りませんが白いゴミ虫は確かプラネテューヌの女神候補生だったと思います。もしくはゴミ虫。」

ファイはあの女神候補生さんに何か恨みでもあるのでしょうか？

「マスター見ているだけでいいんですか？何か凄い事になっていきますよ。」

「……………え？」

私はファイに言われて闘いを繰り広げている二人を見る。

「MPBLオーバードライブ!!」

最近の女神もといこの世界の女神候補生はあんな凄い武器を使っているのか。なんだオーバードライブって？車でも運転するのであるか？

「どのような愉快な事を考えているのかは知りませんが早く黒いのに加勢しましょう？」

「いやいや加勢するならあの女神候補生の娘に加勢しようよ。」

「駄目ですよ。マスターは攻略する側ではなく攻略される側何です

からね。全てのフラグは私が立てる予定ですが。」

ファイが言っている事のほとんどが私には理解出来なかったのだけれどこれは私が悪いのであろうか？

「よし！！良いですよ黒いの。そのままあの白いゴミ虫を潰すんです！！」

「つて！？まずい！！」

ファイの声に思考の渦より呼び戻された私の目に入って来たのはプラネテューヌの女神候補生が今まさに黒い巨人の戦斧によって断罪される場所であった。そしてそれを見た私は反射的に夜傘を羽織り夜笠の中に収納してあった零刹那と菊壺紋字を取り出して黒いのとプラネテューヌの女神候補生の間に割り込む事が出来る場所へ向かって全速力で駆ける。

「マスター足早すぎでしょう！！50m何秒ですか！？」

確かに性転換させられてから身体は軽くなったのだが、突っ込むべき場所はそこではないと思う。

ネプギア side

プラネテューヌの女神候補生のパープルシスターである私ネプギアの心は恐怖と絶望に包まれていました。

「弱い。弱い者との闘いはつまらん！！弱い者は死ね！！」

私、死ぬんだあの斧で切り裂かれて死んじゃうんだ。
いや、死にたくない。死にたくない、
また負けちゃう。

「ネプギアー!!」

「ギアちゃん!!」

アイエフさんとコンパさんの叫び声が聞こえて来ます。けどわたしの身体は恐怖に支配されて身動き一つ動かす事ができません。
死にたくないよ。負けたくないよ。
いや、いや、いや。

「いやああああ!!」

そして私の身体は真っ二つに切り裂かれ……………。

「させない!!」

「……………え?」

私の身体は切り裂かれる事はなく私の命を刈り取る筈だった斧は白くて長い髪を持ったまるでお人形さんの様に肌の白い女の子が銀色に輝く二振りの剣を左右の手に持ち交差させて受け止めていました。

「せええええい!!」

「何だと!?!」

そのまま白い女の子は斧を切り払います。凄いあの娘強い。きっと私なんかよりも強い。

それにとっても……………。

「綺麗。……………貴女は？」

「貴様何だ？」

偶然にも私とあのジャッジ・ザ・ハードの問いが重なる。

「……………行きますプロセスサユニット装着。」

その言葉と共に女の子の身体が光りに包まれます。

これってもしかして私と同じ……………。そして光が止み少女が姿を現します。

「なるほど貴様もそうかそこの小娘と同じか。」

「私の名前はシルバーシスター。通りすがりの女神候補生。記憶しておきなさい。」

銀色の……………私と同じ女神候補生。

ギョウ界墓場でユウは再び剣を握る。だがそれはユウの昔との別れを、決別を意味するのであった。

次回超次元ゲームネプテューmk2

男の娘だった女神候補生

第二話 『この世界に来てから良い事が一つもない』

目覚めろその魂。

第一話『通りすがりの女神候補生』（後書き）

ユーちゃんのお部屋

ユー「こんにちわ。司会進行を務めさせていただきますユーです。」

ファイ「どうも皆さん毒舌アシスタントのファイです。いえーい。」

ユー「じ、自分で毒舌って…。と、とりあえずこのコーナー初のゲストは。」

おー「どうもー！神位第三位の次元神オーディン事おーちゃんだよー！！」

ファイ「なんで初ゲストがこれなんですか？」

ユー「さあ？」

おー「細かい事は気にしないで行こうよ。はいお土産の黒棒だよ。」

ファイ「意外と美味しいですね。」

ユー「かりかり。」

おー「今回は私達神々について説明だよ。」

ファイ「神と言えはマスターも神なのではなかったのですか？」

おー「そうだけど違うんだよ。ユーちゃんはゲームギョウ界の神だけど私は全ての次元、全ての世界を管理する神なのだよ！」

ユー「なるほどー。ってそろそろ時間だね。」

ファイ「悲しいですけどお別れの時間ですよ（にやにや）。」

おー「全然悲しそうじゃないね。まあ、いいやきつと出番がある事を信じて今日は帰るね。バイニー。」

ユー「バイニー。」

ファイ「バイニー。では次回もお楽しみにー。」

第二話『ここに来てから良い事が一つもない』(前書き)

何やらくだくだを超えたガタガタが出来てしまいました。読む場合はご覚悟を。

第二話『ここに来てから良い事が一つもない』

ユウside

「私の名前はシルバーシスター。通りすがりの女神候補生。記憶しておきなさい。」

我ながら何だかカッコイイのではないかと思う。

「どちらかと言うと可愛いですよ。」

どうせ今の私はかつての威厳なんて欠片もないですよーだ。

「何でもいいからファイはこの娘を連れて下がって。」

「お断りします!!」

「いやいや空気を読んでもらえるとありがたいのですが?」

「貴女一人であれの相手をするつもりですか? だとしたら無謀としか言えません?」

「……………本音は?」

「どうして私がこんなクソ虫を助けなくてはいけないのですか?」
素直ですね!!

「まあファイの気持ちも分からないでもないけどね。……………でも私を誰だか忘れたわけじゃないでしょファイブス・ディスク? こんな奴相手に負けるとでも思っているの?」

少し凄みを効かせてみる。

「……………わかりました。危険になったら必ず下がってください。今の貴女は全てにおいて劣化しているんですからそこは忘れないようにしてくださいね。」

何故か軽いため息をつくファイ。

「わかった。だから「何時まで俺を待たせる!?!早く闘え!?!」……。」

人の話を邪魔するとはこの黒いのも空気読めないリストに登録決定だな。

「焦らないで。貴方の相手はしてあげるよ。

だが名乗り返すぐらいしたらどうかな?そのような事がわからない程低脳ではないよね?」

「貴様言わせておけば!?!いいだろう俺の名はジャッジ・ザ・ハード。さあ闘えそして俺の渴きを癒せ!?!」

「ザ・ハード、ある意味因縁かもね。先手は取らせてもらうよ!?!」

ジャッジ・ザ・ハードその名に因縁を感じながらも私は零刹那と菊壺紋字で斬りかかる。

あれに攻撃させる暇など与えず唯一上がったスピードで翻弄してみせる。

ネプギア side

「……………凄い。」

私の目の前ではシルバースターと名乗った少女が圧倒的なスピードで私ではまったくかなわなかったジャッジ・ザ・ハードを相手に善戦、ううん圧倒しています。あの娘は強いきつとお姉ちゃんと守護女神と同じ位に。

「……………本当に綺麗。」

剣を振るう度になびく銀色の髪。強い意思を宿した金色の瞳。抱き締めたら壊れてしまいそうな華奢な身体。

あの少女の姿を見ているだけで私の身体が心が熱を持つ。何故だかわからない。だけでもしもあの娘の隣で一緒に闘えたらどうだろう。あの娘の背中を守りながら闘えたら。そして勝利の喜びを分かち合えたのなら。初めて会った相手だというのに、まだ会話すらまともにしたことがない女の子に私はそんな想いを抱いていた。

「そのクソ虫！何をそんなところでポケットとしているんですか！？ここにいたらマスターの邪魔です。」

誰かが話しかけてくる。聞いたことのない声、誰だろう？今は邪魔をしないでほしい。シルバースターちゃんの事をもっと見ないと、しらないといけないのだから。

「マスターに見とれるのは分かりますがマスターを貴女みたいなクソ虫の視線で汚さないでください。ほら早く逃げなさい。じやないと焼きますよ！！」

マスター？もしかしてシルバーシスターちゃんの事なのかもしれない。私に話しかけてくる娘はシルバーシスターちゃんの何なのだろうか？もし何か知っているのならいろいろと聞き出さないと。

「ネプギアー！！」

「ギアちゃん！！」

この声はコンパさんとアイエフさん。私は振り返ることもせずシルバーシスターちゃんの闘いを見ながら声だけで判断する。

「貴女達このクソ虫の知り合いですか？そうなのだとしたら早く連れて帰ってくれないか？はつきり言って邪魔なんですよ！」

「何なのよあんた！？それにあの娘見たところ女神候補生みたいだけどシルバーシスターってどこの女神候補生よ！？私は聞いた事も見たことないわよ！」

「私もないです。」

人の横で大声で話さないでほしいシルバーシスターちゃんの息づかいが闘いの中ではなく荒い吐息が聞こえなくなってしまふ。

「話は後です。この状況でまともな会話ができるとでも思っているんですか！？」「まあそれもそうね。」

「待つですアイちゃん今ならこのシェアクリスタルで女神様達を助けるチャンスです！！！」

「なるほどコンパにしては名案ね！」

「えっへんです!」

「人のマスターを囚にするつもりですか。まあマスターの事だから気にはしないと思いますが。やるなら早くしてください。」

会話の内容は殆ど耳に入って来なかったけど、『シェアクリスタル』その言葉だけが私の頭の中に響いた。もしかしたらシェアクリスタルを使えばシルバーシスターちゃんを助けられるかもしれない。そうと決まれば私のとるべき行動は決まっていた。

「コンパさんそれを貸してください!!」

「ギ、ギアちゃんシェアクリスタルをどうするですか!？」

「ネプギアちよつと何するつもりよー!？」

「そのクソ虫貴女今行ったら!？」

私は三人の制止する声を見殺してコンパさんの手からシェアクリスタルを取ってそのまま戦闘を行なっているシルバーシスターちゃんの元へと駆けよって行った。

「これがあればきつとあの娘を助けられる。」

ユウside

今出せる限界のスピード、そして手数で攻める剣。つまり……………。

「ずっと私のターンです!!」

「良いぞ! 良いぞ!! もっと俺の渴きを癒してみせろ小娘!!」

ひたすら私の攻撃を超重量武器である戦斧で捌くジャツジ・ザ・ハード。いくつかはその巨体にいれたはずんだけど痛がるどころか逆に喜んでるんだけど。ジャツジ・ザ・ハードまじでジャツジ・ザ・ハードだよ。女の子になったせいで筋力まで下がってるから結構きついんだよね。

「どちらにしてもこのままじゃあじり貧だよね。」

「うおらっ!!」

「くっ!？」

ジャツジの戦斧での薙ぎ払いをしゃがんで避ける。

「ちょこまかと。」

「ただでは転ばない!!」

しゃがんだまま左足を軸にして身体を回転させてその勢いでジャツジの左足辺りを切り裂く。

今のは確かな手ごたえ少しは喰らってくれるとありがたいんだけど。

「良いぞ!!だがもつとだ!!」

「何っ!？」

冗談でしょう弁慶だって泣くよ今の一撃は。

そして私の驚きを無視してジャツジ・ザ・ハードは戦斧を私に向かって振り降ろす。私はそれを紙一重で零刹那と菊壺紋字をクロスさせて防ぐ。だが衝撃が身体にかかりその状態で後ろに飛ばされる。

何とか零刹那を地面に突き刺して身体を止めます。

「紙一重で防いでこれ程だなんて。まずいかな先程の勢いが崩されたら。こうなると手段は一つしかないか。」

手の痺れを感じながらも私は零刹那と菊壺紋字を連結させる。無論妖刀にはならない。なるのは妖力を失ったただの大太刀。だけど今必要なのは大太刀のリーチの長さ。

「…次の一撃で勝負を決めてみせる。」

「何でもいい！もっとだもっと楽しませろ！！」

私は何故か女神化しても羽織っていた夜笠の中に大太刀の半分を隠して腰を落として居合いの構えをとる。

来なさいジャッジ・ザ・ハード。貴方が突っ込んで来た瞬間お前の身体は真っ二つ。……………だけど私の予想は外れた。

「面白いならば。」

ジャッジ・ザ・ハードはこちらへ攻撃する事はなく戦斧を振りあげたところで動きを止める。

「な!？」

「どうした攻撃しないのか？」

このジャッジ・ザ・ハードこちらがカウンター狙いの居合いを決めようとしているの分かっていて動きを止めやがりましたよ。

やはりジャッジ・ザ・ハードまじでジャッジ・ザ・ハード。バトル

ジャンキーならバトルジャンキーらしくひたすら暴れてくれればいいのに。

「下手には動けないかな。」

これが私達の間合い。先に一步踏み出した方が負ける。まさかの我慢比べ。

何かしらのイレギュラーがない限り私に敗北はないはず。

ネプギア side

シルバーシスターちゃんとジャッジ・ザ・ハードの動きが止まった！？

「今なら！！」

どうして動きが止まったかはわからないけれどこのシェアクリスタルでならあのジャッジ・ザ・ハードを倒すまではいかないかもしれないけど少し位はダメージを与えられるはず。

「きっとあの娘の助けになるはず。」

私の頭の中にはシルバーシスターちゃんが笑顔で私にお礼を言ってくる姿がうかんでくる。

ネプギア妄想状態突入！！（これからネプギアのちよつと痛い妄想が始まります。）

『ジャッジ・ザ・ハードこれでも喰らいなさい！！』

ジャッジ・ザ・ハードにシエアクリスタルで攻撃する私。

『やあーらーれたー!!』

なす術なく倒されるジャッジ・ザ・ハード。

『かっこいい!!』

感動して私に敬愛の視線を向けるシルバーシスターちゃん。

『大丈夫!?!』

『ありがとう素敵なお姉さん!』

『す、素敵だなんて…。』

『お礼にお姉さんのしてほしい事何でもしてあげるね!』

妄想状態終了

「えへへ、なら一緒にお風呂に入ろうか? はっ!?! だめだめだめ私
ったら何考えてるの!?!」

でも何でだろう? シルバーシスターちゃんの笑顔を思い浮かべただ
けで鼓動が早くなる。

そんな時であった。動きを止めていたジャッジ・ザ・ハードが斧を
シルバーシスターちゃんに向かって振り降ろす。

ただどシルバーシスターちゃんは動かないで先ほどの同じ態勢
で動きを止めたままでした。私の頭の中には先ほどとはちがいシル
バーシスターちゃんが斧の餌食になってしまう。絶望的な姿が浮か

びます。

私は自分でも驚く位のスピードでシルバーシスターちゃんの元へと駆け寄ります。

「駄目ー!!」

ユウside

動けない、動いたら負け。とりあえずこの膠着状態が続いているうちにファイ達は上手く逃げ延びてくれればいいんだけど。

「どうした攻撃をしないのか？」

「する必要はない。しなくても貴方には勝てるよ。」

これくらいの挑発にのると思えないけれど。

「言わせておけば小娘エー!!」

「………沸点低すぎだよ。」

ジャッジ・ザ・ハードは怒りに任せて鎌を振り降ろす。そこから私は勝利を確信する。居合いでのスピードを乗せた抜刀でまずはあいつの鎌による一閃を受け流す。そしてそのままあいつの身体を真っ二つ。これでいけるはずだ。そして私は再び大太刀に手をかける。

「私の勝ち。これで決める名付けて天駆竜「駄目ー!!」なっ!？」

今まさに私が新たな奥義を発現してジャッジ・ザ・ハードの身体を華麗に真っ二つにする瞬間に突如現れたプラネテューヌの女神候補生の少女が私達の間に割り込む。

「待ってね今助けるから!!」

「ま、待って危険すぎるよ!」

「大丈夫!このシェアクリスタルを使えば!!」

少女が何かを掲げる。あれは信仰の塊^{シェア}? いったいあれで何を!?

「シルバーシスターちゃんは私が守ります!!」

少女は手に持つクリスタルを掲げる。するとクリスタルより光が放たれる。その光にはシェアの暖かさが感じ取れた。そこからあのクリスタルには大量のシェアが凝縮されていた事がわかる。

「ぐあああああ!!」

そしてその光を浴びて苦しむジャツジ・ザ・ハード。

「やった!やったよシルバーシスターちゃん!!」

ジャツジ・ザ・ハードに背を向けてこちらを見る少女。その顔はまるで忠犬が褒められるのを待っているかのようだった。

確かにあのクリスタルはジャツジ・ザ・ハードに効果的なようだ。

上手く使えばかなりのダメージを与えられるはずだ。 だけど今は……最善の一手ではなかったみたいだ。もしくは詰めが甘かったみたい。ジャツジ・ザ・ハードはまだ生きている事を彼女は忘れていたみたいであった…。

「ぐあああああよくも勝負の邪魔をー!!」

ジャッジ・ザ・ハードは目を抑えながらもむやみやたらにその戦斧を振り回す。そしてその戦斧は軌道から考えると女神候補生の少女の身体を真つ二つにするとところであった。

「くっ！？退いて！」

私は少女を突き飛ばすと戦斧切り払う。だがそれでも戦斧による攻撃は止むことなく私を襲う。

「くっ、はあ！！」

このままではいずれ押しきられてしまう。…………どうすればいいのやら。

私がジャッジ・ザ・ハードの攻撃を捌きながら次なる手だてを考えている時であった。

「炎よあらぶる敵を止める渦となれふあいあすとーむ！！」

いつの間にやらこちらに来ていたファイが放った魔法によって炎の渦に閉じ込められるジャッジ・ザ・ハード。

「マスター今が好機です。この炎も長くはもちません。」

「助かったよファイ！よし、奥義見よう見まね燕返し！って上手くいったよ…。」

大太刀を上段に構えた私とはあるアニメの剣士の技を見よう見まねで放つ。意外と上手くいくもんだね。まあある程度は劣化しているんだろうけど。燕返しは一度に三つの斬撃を放つ奥義なんだけどシルバーハートの時はスピード、身軽さが足りなかったから出来なかった。けど使用出来たのは女の子になって身軽くなったおかげであ

ろう。まさか性別が変わってメリットがあるなんてね。
そして放たれた三つの斬撃はジャツジ・ザ・ハードの右腕を斬り落とす。

「ぐっ!?!? ぐうおおおお!!」

「……………凄い。」

「お見事ですマスター。さすが私の嫁です。」

「とりあえず早く撤退を。……………なっ!?!」

撤退を提示する私だったけど振り返りプラネテューヌの女神候補生の少女の方向を見た瞬間全速力で駆け出す。

なぜなら斬り裂かれたジャツジ・ザ・ハードの腕から抜け落ちた戦斧が放物線を描いて落下しようとしているからである。……………そう、

あのプラネテューヌの女神候補生の少女の元へと。

きっとあの娘は何か憑かれているに違いない。

「はぐうっ!?!? ってやっぱ無理!?!」

なんとか戦斧を切り払うが無駄に遠心力とかかっているせいもあって先ほどの戦闘で体力も気力も消費した私は不様にも仰向けに倒れる。その瞬間に女神化も解けてしまう。

だが今そんな事はどうでもいい。

今重要なのはあの戦斧を切り払った時に『ガキン』と何かが折れたかの様な音がしたことであった。私は恐る恐る手元の太刀を見つめる。そこには連結が解除されていた零刹那があった。ただし根本からボッキリと折れていたけれど。ちなみに菊壺紋字は少し離れた所に突き刺さっていた。

「そ、そんな今まで一緒に闘ってきた相棒が……………」

折れた刀身？そんなの私の右脇腹を浅く切って私の真横に突き刺さってるよ。

痛くないのかって？痛いよでも今は……………」

「ううつ、ぐすつ。ひぐつ、ううつ。」

零刹那の折れた刀身を見ると何故か涙が止まらなくなっていました。必死に折れた刀身と柄をくっ付けようとしたり感情的になっていた。どうして私はこんなにも感情的になっているのだろう？

「ま、マスター大丈夫です。出血は酷いですが命に別状はありません。だから落ち着いてください。」

「怪我なんてどうでもいいからこれを直してよ。」

私は折れた零刹那をファイの前に突きだす。

「残念ながら私には無理です。」

「ううつ。……………ここに来てから良い事が一つもないよ。」

そうやって私は立ち上がり零刹那と菊壺紋字を回収して夜笠の中に入れる。

「それにしてもマスター随分肉体に精神が惹かれてきましたね。」

「…どういう事？」

「マスターの身体が女の子になった上に幼くなってしまった為に精神年齢が肉体年齢惹かつつあるのです。詳しくは後書きで。」

「そんなメタ発言して大丈夫？」

「きっと皆さんスルーしてくれますよ。とりあえず傷の応急処置をしておきます。」

ファイの手が傷口に添えられてそこから暖かい光が出て傷を癒してくれる。

「ちょっと痛い。」

「

「我慢してください男の子でしょう？」

「今は女の子だけど。」

「認めましたね。……これでよし、マスター終わりました。直ぐ様ここから退きましよう。」

「でも退くと言っても何処に「だ、大丈夫シルバーシスターちゃん！？」あ、もしかしてさっきの女神候補生さん？」

私が軽く途方にくれればいると先ほどの女神候補生の少女が 女神化が解けた状態で走り寄ってくる。

「だ、大丈夫？ 怪我してたよね？ 私軽い治療なら出来るから見せて！」

「あ、いや大丈夫だよ。出血も止まってるし傷も塞がっているから。」

」
「駄目だよ！下手したら傷口からバイ菌や雑菌が入って化膿して膿が溢れ出てさらには爛れて大変な事になっちゃうよ！！」

「だ、大丈夫だよ！ってちよつとスカートを引っ張らないで。」

この娘はこの状況を理解しているのだろうか？とりあえずこのようなところで脱がせられる身にもなってもらいたい。

「だったら早く脱いで！！」

「調子に乗らないでください！！」

「へぶうつ！？」

スカートを何故か引き下ろされそうになっていたけどファイが助走を付けてからのドロップキックで彼女を蹴り跳ばしてくれたおかげで助かりましたよ。

「ファイ今のは？」

「ドロップキックですけど何か？」

「いや、あの助けてくれてありがとう。」

「……………どういたしまして。」

やり方はあれだけど一応助けてくれたのでお礼は言っておきました。

「ううっ、痛いよ。」

「だ、大丈夫？」

「あ、うんありがとう。」

痛みに後頭部を押さえて膝をついていた少女に手を貸して引き上げる。そして何故か少女は顔を赤くしていました。大丈夫だよはじめてドロップキックを受けた人は皆そんな顔をするから。

「なにマスターの手を握ってるんですか。なに赤くなってるんですか。なにドキッとしてるんですか。調子にのるなよこのクソ虫。」

「ちょっとファイいきなり何言ってるの!？」

「…………シルバーシスターちゃんの手暖かい。」

「ちょ、きもすぎですこのクソ虫。それにマスターの手は暖かいに決まってるでしょう。しかも良い匂いまでするんですよ。」たぶん一言多いよファイ。それといつ私の手の匂いを嗅いだの? とりあえずこのコントを続けている二人に現実を直視させることとしましょう。

「二人ともとりあえず後ろを見てくれるかな?」

そこにこの空気を叩き壊してくれる現実ジャッジがあるから。

「うなじというのなかなかそそりますね。」

私の髪を捲りあげてほうほうと頷いてみつめるファイ。

「違うから！私のうなじじゃなくて私の背後少し離れたところを見て！！」

「「え？」」

「目があああああああ！腕がああああ！！おのれ貴様ら目が治ったら殺してくれるわああ！！」

残った片手で目を押さえて膝を付くジャツジ・ザ・ハード。手負いの筈なのに

その気迫は衰えていない。寧ろ先程より闘気も殺気も格段に増していました。よくこんな相手にして私はまともに闘えたものだよ。

「何か面白いので写メを撮りましょう。パシヤリ。」

だがファイ達の前ではそんな緊迫した空気さえも簡単に霧散してしまふみたいだ。「あ、携帯持ってたんだ。っていい加減にしろー！！」

「うわぁマスターが怒ったー（棒読み）。」

「怒ったシルバーシスターちゃんも可愛いよ！！」

ファイを押し退けて発言をする女神候補生さん。

「はい！？君まで何言ってるの？」

駄目だ私ではこの二人を止める事はできないのか！？

「ちょ、ちょっと貴女達何やってるのよ！？早く逃げるわよ。」

「そうですよ！シエアクリスタルも砕けちゃったです。」

あれ？今どこかで聞いた事のある声がしたような？

「そうですね。マスターあまりふざけてないで状況を見てください。」

「はい！？」

「そうだよ早くプラネテューヌに戻ってシルバーシスターちゃんの怪我の手当てをしなくちゃ！」

「え？何なの何か打ち合わせでもしてたの！？もしかして私仲間外れ！？」

「さすがですマスター予想通りのリアクション。ぐっじょぶです。」

「やっぱりからかっていたの！？」

「早く行こうシルバーシスターちゃん！」

「って痛い！引っ張らないでよ！」

女神候補生の少女によって物凄い力で引っ張られた私は痛みを感じながらもこの状況を打開する方法はないかと考える。

「そのクソ虫。マスターに気安く触れるとは良い度胸していますね。私の右腕が火を吹きますと言わせてもらいましょう。」

「はあ。本当にここに来てから良い事が一つもない。」

そして私はどこに連行されるのだろうか？

プラネテューヌの女神候補生ネプギアと出会ったユウはプラネテューヌの教祖を名乗る者に出会う。次回超次元ゲームネプテューヌmk2

男の娘だった女神候補生

第三話「プラネテューヌの教祖」

闘わなければ生き残れない。

テイル○風スキット

親近感

アイエフ「あのシルバーシスターって娘、私と同じ匂いをするわ。」

コンパ「同じ匂いですか？」

アイエフ「ええ俗に言うツツコミ苦労人臭が。」

コンパ「……………アイちゃん。」

第二話『ここに来てから良い事が一つもない』（後書き）

ユーちゃんの部屋

ユー「こんにちわ皆さん。二回目となりましたこのコーナー。司会のユーです。」

ファイ「いつも貴方の後ろで焼き殺す機会を伺っていますアシスタントのファイです。」

ユー「今回のゲストはこの方！」

ジャッジ「ジャッジ・ザ・ハードとは俺の事だ！」

ユー「ネプギアちゃんを期待した方は申し訳ありません。」

ファイ「あんなクソ虫どうでもいいじゃないですか。それにしても

ジャッジ貴方腕はないですけど大丈夫なんですか？」

ジャッジ「既に新しい腕をマジックが制作中だ…。」

ユー「す、すいません。腕は痛くないわけですね？」

ジャッジ「大丈夫だ…。だからそんな泣きそうな顔をするな。土産の俺のつけた漬物だ。これでも食えや。」

ファイ「これは…。ちょっとスタッフ！ご飯持ってきてください！」

ユー「凄く美味しいですよ！」

ジャッジ「気に入ったか？」

ユー「はい！」

ファイ「とりあえず今回の本題に移りましょう。今回はマスターの肉体の変化による精神の変革についてです。本文のマスターは男の娘だった頃の記憶や認識のせいでもだまだ完全に自分が女の子だと認めていません。ですが後書き、感想の時のマスターは肉体も精神も完璧な女の子になっている状態なのです。」

ユー「なら本文のわたしが精神まで女の子になるのは…。」
ジャツジ「時間の問題か…。」

ファイ「そうですね。まあこれは仕方のない問題なので諦めてくださいね。とりあえずそのせいもあって作者のトマトはあえてユースideではなくユウsideにしているわけです。これもまた時間の問題ですが…。」
ユー「とりあえずそろそろ時間なのでまた次回もお楽しみに。ジャツジさんありがとうございます。また来てくださいね。」

ジャツジ「気が向いたらな…。」

ファイ「スタッフ！ご飯御代わりを所望します。」

第三話 『プラネテューヌの教祖』 (前書き)

今回は話しはそこまで進みません。寧ろガタガタ感が満載です。見る時のご覚悟を。

第三話『プラネテューヌの教祖』

ユウside

現在私はプラネテューヌの教会に訪れていた。いや連れてこられていたと言うのが正しいのかもしれない。先ほどまで右腕をプラネテューヌの女神候補生に握られていたのだがファイが女神候補生の背中に二度目のドロップキックを放ち軽く吹き飛ばした。今はその教会にてプラネテューヌの教祖に会うところである。

「それであんた達はあそこでなにしてたのよ。」

「あ、ええと……………」

私は視線でファイに助けを求める。

「それは教祖が来てから話すといった筈ですよジャリ娘。」

「誰がジャリよ!? 誰が!!」

「アイちゃん落ち着いてください。大人気ないですよ。」

「……そうね少し焦りすぎてたわね。ごめんなさい。」

「意外と物わかりいいですねジャリ娘。」

「またジャリって言ったわね!!」

「アイちゃん我慢するです。」

ファイはたぶんDSなんだろうと思う。だってアイエフさんが怒ってるのを見て悪い顔をしているから。コンパさんがんばってアイエフさんを抑えて。

「あ、あのー。」

「こっちくんなよクソ虫。」

「あうー。」

こちらに話し掛けようと近づいてくる女神候補生の少女をファイは一蹴する。

今度は冷めた目でファイは彼女を睨み付けていた。

何かフォローを入れるべきなのだろうけど今は私喋れないんで。

実はここに来る途中ファイに良いと言うまで喋らないでと言われた。その理由としてはあそこでプリプリと怒っているアイエフさんとそれを必死に宥めているコンパさんにある。

実をいうと私は前にいた世界で彼女達二人にあった事がある。正確には別人だけれど。

そこまで面識はなかったんだけど。

ファイが言うにはここは私がいた世界の平行世界、パラレルワールドでありそこにいた人物とよく似た人物達がいるらしい。

姿形は一緒だけど記憶や生きてきた歴史なんかは全然別物らしい。何故それが喋れない理由になるのかというとファイ曰く私は考えている事が顔に出るそうで、しかも予期せぬ事態に会うと確実にとんでもない事をしでかすそう。

悔しいが否定できない。コンパさんとアイエフさんの姿を見た時も驚きを隠せなかった。

ポーカーフェイスには自信があったのだけどどうやらまだまだのようだ。これを期に少し練習を試みる事にしよう。

「マスター現実に帰って来てください教祖が来ましたよ。それと覚悟をしてください。あと考え事をしているマスターきゅーとでしたよ。」

ファイの言葉による思考の渦より現実に引き戻された私は現れた教祖に目を向ける。そして直ぐに逸らす。

「お久しぶりですねネプギアさん。身体の方は大丈夫ですか？」

「あ、はい大丈夫です。」

「ギアちゃん少し休まなくて大丈夫ですか？」

「私は大丈夫です。でも……………」

女神候補生の少女、どうやらネプギアさんと言うようみたいだ。そのネプギアさんがこちらを心配そうに見つめてくるんだけど今の私にはそんな事を気にする程の余裕はなかった。

「マスターあれは貴女が知っている史書ではありませんよ。落ち着いてください。」

「うん。少しは驚いたんだけど大丈夫。それでファイはどうして私のスカートを引き摺り降ろそうとしてるのかな？」

「無論マスターを落ち着かせる事が目的です。」

「落ち着いたから止めてくれるかな？」

「嫌です。」

「何で？」

「パンツ見たいからですよ。あ、すいません噛みました。マスターは心の中ではきつとまだ悩んでいる。だから私はマスターを救いたいです。」

「噛んでないよね！？前者が本音だよね？」

「そうですよパンツが見たいんですよ。だから脱いでくださいマスターいやなら無理矢理にでもします。寧ろ私は脱がせたい。」

「開き直ったね、開き直ったね。でも残念でした。私はスパッツ穿いてます。」

「スパッツなんてこの世からなくなってしまうばいいのに。こんちくしょー。」

「それはスパッツを愛してやまないスパッツマスターである私に対する挑戦と受け取ったよファイ。」

この娘にはスパッツの有用正を一から叩きこまなくてはいけないと私が考えている時であった。

「盛り上がっているところ申し訳ありませんがお話を聞かせてもらって宜しいでしょうか？」

「スパッツの？」

「いえ、それは大変興味深いのですがまた後日に。」

少し困った顔で話し掛けてくるのはこのプラネテューヌの教祖であ

る…………。

「名乗りもせずに申し訳ありません。私はこのプラネテューヌの教会の教祖をしていますイストワールといいます。」

「こ、これはご丁寧にはユウと言います。一応女神候補生をさせてもらっています。」

「私はファイです。こちらにいるマスター事ユウ様の下僕及び奴隷及び愛の語り手しております。気軽に女王様、ご主人様もしくはファイたんと呼んでください。」

さつきからこの娘は何を言っているのでしょうか？

「でしたらファイたんと呼びますね、私の事はいーすんで構いませんよ。」

「わかりましたいーすん。」

なんだろうこの二人身体から放つ波長が似ている。

「ユーちゃんって言うんだ私はネプギア。ユーちゃんと同じ女神候補生をしてるの宜しくね。」

「ユーちゃんじゃなくてユウちゃんだからねネプギアさん。これ結構重要だからね。」

ユーちゃんだったらネクロマンサーの少女になってしまうのでここは重要である。

「うん、わかったよユーちゃん。それと私の事は呼び捨てでいいからね。」

「ああ、うんまあいいや。じゃあネプギアちゃんでもいいかな？」

まあネクロマンサーの少女の事なんて誰も知らないからいいよね。それにしてもネプギアちゃんは何を興奮しているのだろう？顔を真っ赤にして。

「うん！えへへ。なんだか照れるね。」

ネプギアちゃんがそう言いながら私の手を握った瞬間であった。

「いや別になん「教祖アタック！。」ちょっと！？」

それを見ていたファイが突如教祖様を投げつけてきた。教祖様はネプギアちゃんの後頭部に直撃した。

「あうっ！？痛いよー。」

「見事な投擲でしたね。」

「だ、大丈夫ですか教祖様、ネプギアちゃん。」

「問題ありませんよ。寧ろあのような投擲を味わえた事は行幸でしたよ。」

「私も大丈夫だよ。ちょっと頭が痛かったけどね。」

「とりあえずファイは何をやリたかつたの？そして何故教祖様を投げたの？」

「そこに教祖がいたからです。」

いや、確かに投げやすそうなのは認めるけどね。

「ファイ絶対に反省してないよね!？」

「当たり前です。後悔もしてないですし反省なんてもっとしてないですよ。」

「愉快的な人達ですね。」

疲れるだけですよ教祖様。

「それで結局あんた達は何処から来たのよ。」

呆れた様に額に手をおきながらアイエフさんが聞いてくる。私達は他の世界から来ました。なんて言えないけれどファイはどうするつもりなんだろう？

「マスターの故郷はあの獅子座です。」

とりあえずファイが指を指す先には壁しかないよ。

「ならユーさんはレ○!ウルト○マン○オなのですね?」

教祖様なんかノリノリですね。っていうかよく知っていますね。

「その通りです。そして私はウ○トラマンキ○グです。」

「ならば教祖である私はウルトラ○ンネク○スです。」

「いーすん話がわかりますね。」

「そういうファイたんこそ。」

「「じゅわっち。」」

教祖様とファイがまるで光線が出そうに腕をクロスさせている姿を見た私はそろそろやめさせようと二人のところに近づくけど……………。

「待ちなさい。」

何故かアイエフさんに制される。

「はい？」

「これを受け取って。」

渡されたのはハリセン。その瞬間に私は自分が何をすればいいかを悟る。

「私はアイエフ。貴女と同じ道に行くものよ。」

「……ならいちにの三でいきましょう。」

「構わないわ。なら行くわよ、一。」

「一の。」

「三、いい加減にしろー!!」

「ぎゃふん。」

それはそれは見事なツツコミだったそう。

ユウ改めてユースide

「私があそこにいた理由は「シ○ツカーの追跡を逃れる為です。」
……………」

もういい加減にしてよファイ。

「ねえユーちゃんシヨ○ーって何？」

「ここというならマジエコンヌみたいな悪の組織。」

「ユーちゃんは悪者に追われてるの!？」

「いやいやシヨ○カーは現実には存在しないからね。空想状の組織。あれはファイがふざけてるだけだから。ファイの言っている事は半分は信じたら駄目だから。」

「そしてシ○ツカーとマジエコンヌが手を結んだと言う情報が入ってきています。」

教祖様何を言っているんだよあんたは!？

「そ、そんなマジエコンヌだけでもこんな状況なんですよ。それなのにまた新しい敵が……………」

ほらコンパさんが信じたじゃないですか。なんであんたらは場をかき乱すんですか!?

「こんぱイストワール様が悪のりしてるだけよ。○ヨツカーなんていないわ。」

なんだろうアイエフさんと私の立ち位置がよく似ているような?

「さてとそろそろ本題に入りましょうかいーすん。」

「ファイたんの言う通りですね。皆さん真面目にしてくださいね。」

「「あんた達が言うなよ!!」」

「「きゃははは。」」

「お互い苦勞するわね。」

「あ、あはははは。」

アイエフさんも苦勞しているんですね。お互い頑張りましょう。

ユー（どちらかと言うとツツコミ派） side

「私とマスターがギョウカイ墓場にいた理由は女神救出の為です。」

無論嘘である。

これもプラネテューヌに向かう途中にファイと決めた事、嘘と真実を混ぜ合わせて話す。

語りはファイに任せる事になっている。理由は……どうせ私はポーカーフェイスなんてできないですよ。

「やっぱりユーちゃんもそうだったんだ。」

何やら嬉しそうにこちらを見つめるネプギアちゃん。ごめんなさい嘘です。実は幼女神に飛ばされました。だからそんなキラキラした純粋な目で私をみないで。

「そしてそのクソ虫のせいで大失敗しましたけどね。」

少しはオブラートに包んだ言い方をしなさいファイ。ほらネプギアちゃんがなんだか一回り位小さくなった。

「ちょっとネプギアばかり悪くいわないでよ!!」

「アイエフさんいいんです。ファイさんの言っている事は事実です。私が足を引っ張らなかったらユーちゃんも怪我しなかったですし、お姉ちゃん達も助ける事が出来ました。本当にごめんなさい。」

もしかしてネプギアちゃんって一人でいろいろと思い詰めるタイプなのだろうか？あまり考えすぎないといいんだけど。

「本当に反省しているんですか？さっきからマスターの事舐め回す様に見て。もしや嫌らしい事でも考えていましたか？もしそうだったら焼き殺しますよ。」

「……………」

ネプギアちゃんは顔色を変えて俯いてしまう。うちのファイが本当にすいません。

「ファイさんさっきからどうしてギアちゃんの事酷く言うんですか！？」

「マスターこいつうざいので焼いていいですか？」

「ひいいい！」

いやいや何了承とる前に火を放ってるの！？コンパさんに直撃しかけたよ！

「ファイいい加減にしなさい。」

「わかりました。良い加減に焼きます。」

「ファイ！！！」

「……………軽い冗談ですよ。そんなに怒らないでくださいよ。」
「ごめんなさいコンパさん。」

「ユーちゃんは悪くないですよ。それに私は大人ですからちよつとやそつとじゃ怒らないですよ。」

「ありがとうございますコンパさん。ネプギアちゃんもごめんね。」

「……………てないよ。」

「ん？どうしたのネプギアちゃん？」

「…………私見てないよ。」

「え、ええと？」

俯いたまま何かを呟くネプギアちゃん。様子がおかしいと思い回りに確認をとるけど皆首を傾げるばかり。

「私はユーちゃんの事ファイさんが言うような変な目なんかで見てないからね！！」

「は、はぁ。」

突如顔を上げて私の両手を凄じい力を握ると何やら力説し始めるネプギアちゃん。もしも変な目で見られていたとしてもそれはしかたないよね。だって通りすがりの女神候補生とかよくよく考えると凄じい恥ずかしいよね。

「み、見つめていたのは事実なんだけど寧ろ髪が綺麗だとかどうしてあんなに可愛いのかなぁとか思ってただけなの。決して変な目で見てたわけじゃないからね。本当だよ、信じてね！」

「は、はい。…………か、可愛い。」

元は男であった身としては何かグサツてくる物が。

「まさかマスターこんな初期の段階でフラグ立てるとかあり得ないでしょう。」

「青春ですね。若いっていいですね。」

「とりあえず脱線し過ぎよ。あんたらは結局何者なのよ。シルバーってどこの女神候補生よ。」

「ラストイションはブラックですよね。」

「ルウィーはホワイトですね。」

「リーンボックスはグリーンよね。まあそれ以前にあそこには今女神はいなかったわね。」

「プラネテューヌは勿論違いますしね。」

「………ファイ。」

「マスターは黙っててください。無理して言わなくてもいいのですよ。あのような辛い事はマスターは思い出さないでいいのですから。」

「……………え?。」

「もしか何か始まったのか?」

「ここで話す事は絶対に口外しないでくださいね。もしも誰かに話した場合私の全力を持って焼き殺しますのです。」

「わかりましたプラネテューヌの教祖イストワールの名において約束します。」

「プ、プラネテューヌの女神候補生の名において約束します。」

「プラネテューヌの諜報部の名にかけて口外しないことを約束するわ。」

「プ、プラネテューヌの新人ナースの名にかけて約束するです。」

「別に無理して前置きを付けなくてもいいですよ。」

プラネテューヌの新人ナース名にどれ程の力があるのでしょうか？

「マスターは別世界の女神候補生です。」

あれ？それは言ってよかったの？皆啞然としてるよ。

ネプギアちゃんはキラキラした目でこっちを見てるけど。

「驚くのはわかります。信じられないのもわかります。マスターが可愛いのもわかります。ですがこれは全て事実です。マスターはその世界で全ての住民に愛され、可愛がられていた女神候補生だったのです。」

「それでその別世界の女神候補生がなんでギョウカイ墓場にいたのよ。わざわざ別世界の女神様を助けに来る為に世界を越えてきたわけ？」

「ユーちゃん凄いね！どうやって世界を越えてきたの！？もしかして世界を越える機械とかあるの？」

あったら面白いんだけど私は幼女神によって飛ばされただけです。何度も言うようで悪いんですけどそのキラキラした目で見ないでください。

「ふざけないでください！これは真面目な話なんです！軽い気持ちなら聞かないでください。」

いやいや寧ろ半分位聞き流していいと思うよ。

「え、ごめんなさい。」

「まあいいです。マスターが可愛いから許します。マスターはその世界から逃げてきたのです。正確には自分の姉でありその世界の女神であるシルバーハートのもとより。」

「お姉ちゃんから逃げてきた？」

「その通りです。マスターの姉であるシルバーハートは妹であるシルバーシスターであるマスターを殺そうとしました。」

「そ、そんなどうしてそんな酷い事するんですか!？」

「邪魔だったからですよ。自分より有能な妹が自分より住民に好かれる妹が。」

「そ、そんな理由でユーちゃんを殺そうとするなんて……………。実のお姉ちゃんがそんな事するなんて信じられないよ。」

「私も殺そうとする事はないと油断していました。マスターはただシルバーハートに喜んでもらおうと、大好きなお姉ちゃんの為に頑張っていただけなのに。」

「有能な妹と無能の姉。……………典型的ね。」

「事実ですから否定はしません。私はマスターの命を救う為に禁忌とさえ言われていた異世界へ渡る禁術を使いました。そしてこの世界の女神に保護を求めようとした。ですが女神が全員ギョウカイ墓場に捕らえられている。そう聞いた為にマスターが女神を救出する為にあのギョウカイ墓場にいたというわけです。」

よくもまあそんな嘘がすらすらと出るね。ある意味関心しながら私はファイを見つめていた。

「なるほどね。だいたいじつまはあうわね。イストワール様どうしますか？」

「ちょっとファイこっち来て！」

「なんですか。もー。」

アイエフさん達が相談を始めたのを見て私はファイを引っ張って部屋の隅に連れていく。無論先ほどの問題発言についてである。

「あんな事言ったら私のシルバーハートとしての株が大暴落だよ！」

「大丈夫ですよ。マスターがシルバーハートに戻る日なんて二度と来ませんよ。」

「そうさくつと言われると何かぐさつとくるよ。まあ大丈夫…だと思いたい。」

だがこの時に誤解を解かなかった事があんな悲劇に繋がってしまうなんて今の私にはまったく考えが至らなかった。

「とりあえずマスターこっちを見てください。」

「何か「はい、ぷしゅー。」ごほっ！えほっ！！」

ファイに言われて振り返った私は突如顔に赤い何かを吹き掛けられた。

「これは唐辛子粉末入り催涙スプレーです。かなり強力なのでしばらくは涙が止まりませんよ。」

「ううつ、ぐすつ、ううううう（何がしたいんだよ）。」

「マスターが下手に喋ると可笑しな事になるんでとりあえず泣いておいてください。ほらいきますよ。」

「うわああああん（謀ったなファイ、目がいたいー）。」

目に走る激痛に涙しながらもファイに連れられて再び皆の元に戻る。

「すいません戻りました。」

「ううつ、ぐすつ、ふわぁ（やばい目を開けても痛いし閉じても痛いよ）。」

「ユーちゃんどうしたの！？」

「シルバーハートに今までされてきた様々な非道な行いを思い出し

て今まで我慢していた感情が溢れ出て来てしまったようです。」

「うわあああああああ（痛みが収まらない、寧ろ痛くなってきたああああ）！！」

「ユーちゃん大丈夫だから。大丈夫だからね。ここには誰もユーちゃんの事を苛める人はいないからね。いたら私が……………」

「てめえなにさらっとマスターを抱きしめてやがんですか調子に乗らないでください。」

「うわあああああ（優しさが心に痛い。）」

「…………ユーちゃん。」

「ユーちゃんかわいそうです。」

「心の中に抱え込んでいたのね。今は泣きなさいユー。」

「うわあああああ（ごめんなさい目が痛くて泣いてるだけなんです）。」

「とりあえずマスターを休ませたいのですが。質疑応答には私が対応しますので。」

「わかりました。では人を呼びますのでその方にお世話を「待ってください。」ネプギアさん？」

「私がユーちゃんと一緒にいます。私がユーちゃんのお世話をします！」

「ですがネプギアさんにはギョウカイ墓場での事を聞かなくてはいいけません。」

「そうです。貴女がどさくさに紛れてマスターに破廉恥な真似をする事も否定できません。」

「いいんじゃないんですかイストワール様。同じ女神候補生同士なら気を使わなくていいでしょうし。」

「……わかりました。丁度ネプギアさんの部屋の隣の部屋が空いてますからそこを使ってもらいましょう。ネプギアさん部屋の場所は三年前と変わっていませんのでユーさんを案内してあげてください。」

「はい、わかりました。ユーちゃん行こう。」

「ううつ、ぐすつ。ふぁぁん（覚えてろよファイ）。」

ネプギアちゃんに付き添われてその部屋に向かう私はファイを絶対に文句を言っただけやる事を心に誓うのであった。

ファイside

マスターがああクソ虫女神候補生に連れられて去っていくのを横目で確認しながら私は一番の難敵を黙って見つめます。

「アイエフさん、コンパさん。悪いのですがファイさんと二人だけにしてくれませんか？」

「ええ、でも……………」

「こんぱ待ちなさい。あのイストワール様の目を見なさい。あれは本気の目よ。私達の出る幕ではないわ。失礼しましたイストワール様。ほら行くわよこんぱ。」

「は、はいですー。」

あの二人を退かせて本性を現すつもりでしょうか？私はここで死ぬつもりはありません。マスターと添い遂げるまでは。

「さてそれではファイたん。」

「なんでしょうかいーすん。」

にこやかに微笑んではいますが心の内では一体何を考えているのでしょうか？この世界に来て間もないというのにこれほどの難敵ですか。

ここで下手に動いてマスターを不利にするわけにはいきません。慎重にいかなくては。ああそれにしてもマスターは大丈夫でしょうか。あの女神候補生にセクハラされてないでしょうか？

「私はファイたんが何を考えて、何を目的にして動いているのかは知りません。ですが一つだけ分かるのはファイたんがユーさんの事を大切に思っているのはわかります。」

当たり前です。私はマスターの嫁でありマスターは私の嫁であるのですから。

「いーすんは何が言いたいのですか？」

「それほど誰かを想う事ができる人が悪い人ではないと私は思います。」

「……………根拠は？」

「それを説明するには3年かかりますよ。」

正直度肝を抜かれましたある意味で。教祖イストワール侮れませんね。

「……………はぁ。真面目に考えていた私が馬鹿みたいです。」

「ふふっ、ファイたん実は私ウ○トラセ○ンのDVD全巻持っているのですが一緒にみませんか？」

「……………慎んで参加させてもらいます。」

……………少しは他人を信用してみるのもいいかもしれませんね。

ネプギア side

今私はユーちゃんを私の部屋の隣の空いた部屋に連れてきています。

「ううつ、うぐっ、ああ。」

「ユーちゃん大丈夫だからね。」

何が大丈夫なのか自分でも分からないまま私は泣き止まないユーち

やんを部屋に備え付けられていたベッドに座らせて抱きしめていました。

「ご、ごめんねぐすつ、ふあっ、いが。」

「無理して喋らなくていいよ。私はお姉ちゃんに優しくしてもらっていたからユーちゃんの気持ちに正直分らないんだ。だけどユーちゃんの悲しみを少しでも減らしてあげたいそう思っているの。だから……………」

「ううっ、ぐすつ。ネプ、ギアちゃんお願い、ぐすつ、あるんだ。」

「何？何かいる？もしかしてお腹すいた？軽い食べ物で良ければ私作れるよ？」

「ちが、違うの。ぐすつ。」

「…………ユーちゃん？」

私は魅いられました。涙を瞳に溜めて上目遣いでこちらを見るユーちゃんに。その姿に私は胸を締め付けられました。この娘をユーちゃんを守りたい。守るだけの力が欲しいと。そしてこの娘に酷い事をしたシルバーハートへの怒りと憎しみを心に抱きました。

（どうしてこんなに可愛いくて綺麗な女の子に酷い事ができるの。もしもシルバーハートがユーちゃんの前に現れたのならその時には私が…………。）

そして私は自然とユーちゃんの頬に手を添えます。柔らかくすべすべとした頬。そして私の目は自然とユーちゃんの唇に柔らかそうなピンク色の唇に目を奪われてしまいます。

「…………ううっ、ネプギアちゃん？」

もしもここであの唇を無理矢理奪ってしまったらどうであろう？そんな疑問が私の頭を一瞬駆け抜ける。

い、いけないそんな事をしたらユーちゃんにしたら確実に嫌われちゃう。もしかしなくてもそんな事をすれば女神候補生失格。下手すれば犯罪者扱い。

そう考える一方で寧ろ奪ってしまえばいい。こんなに可愛い娘をどうにかしないほうが可笑しいというよく判らない考えも出てくる始末である。

（いったいどうすればいいのお姉ちゃん！？）

私は今は亡きお姉ちゃんに助けを求めます。（ギョウカイ墓場に捕らえられているだけなのだが精神状態が不安定なネプギアがそう言っているだけ。）

答えてくれるわけはなく私の頭はパニックに陥ってしまいます。

「ネプギアちゃん、ぐすつ、お願い。」

潤んだ瞳でこちらに何かを請うユーちゃん。

ま、まさかユーちゃんも私を求めてくれて……………！？

ネプギア妄想状態突入！！（注意、これからネプギアのちよつと痛い妄想が入りますのでその点を忘れずにご覧くださいね。）

『ネプギアちゃん私心細かったの。でもネプギアちゃんが守ってくれるって一緒に居てくれるって。そう言ってくれてとっても嬉しかったよ。』

そう言って私の身体を優しく抱きしめるユーちゃん。その身体は少

し震えていました。そしてとっても甘い匂いがして私は驚きに支配されながらも自分を抑える事が出来るのか不安でしかたありませんでした。

『ユーちゃん!?!』

『私ネプギアちゃんの事好きになっちゃったみたいなんだ。』

『ええ!?!』

『でも嫌だよ。私みたいな泣き虫なんかうっとおしいだけだよ。』

『そんな事ない! そんな事ないよ!?! 私もユーちゃんの事が好き! 大好きだよ!?!』

『嬉しい。嬉しいよネプギアちゃん。だったらお願いキス…して?』

抱き合っていた身体を少し離すとユーちゃんは目を瞑るところに顔を向けます。もう何も気にする事は私にはありませんでした。ユーちゃんが私の事を求めてくれたのですから。

妄想状態終了

それなら私の取る行動も一つ。全力でユーちゃんを愛して守り抜くよ!

「ユーちゃん！わ、私「……………顔洗わせて。」はへっ？」

「顔を洗いたいんだけど洗える場所は……………なんだ意外と直ぐ近くにあったんだね。」ユーちゃんは私の元から離れると部屋に備え付けられていた洗面台で顔を洗っていました。

私はただ呆然とその光景を見ていました。

ユー s i d e

「……………さっぱりしたあ。」

ファイによって唐辛子地獄を味わった私は何とか顔を洗う事でその地獄を脱出する事ができた。

「……………あ、ああつ。」

「ん？どうかしたのネプギアちゃん？」

「ち、違うのわたし私は……………ご、ごめんなさい！！女神候補生失格ですー！！」

「え、何。どうしたの！？」

何故か謝り部屋を飛び出していくネプギアちゃん。私は何かされたのだろうか？唐辛子地獄のおかげでパニック状態だった為に状況把握が殆どできていなかったんだけど。

「もしや逆に何かしてしまったのだろうか！？だとしたら謝らない

と。でも今は寝よう。正直眠たくて仕方ない。また明日謝る事にしよう。」

私はそのままベッドにダイブすると睡眠欲に勝つ事ができずに目を閉じる。

「しまったコート脱ぐの…忘れ…た。…………ぐう。」

ファイ&いーすんside

その頃ファイと教祖イストワールは…………。

「いーすん貴女は間違っています。ウ○トラ戦士最強はタロ○氏です。ウ○トラダイナ○イトはまじチートです。」

「いえやはりセ○ン氏でしょう。アイスラッ○ーはスーパー硬いですよ。」

「なら息子の○ロ氏はどうするんですか？」

「ゼ○氏は別です。別次元です。それに○ロ氏が出てくるならベリ○ル氏はどうするんですか？」

「あれはウル○ラマンとはいえないですよ。」

「ファイたん、ああ言えばこう言いますね。」

「そういういーすんこそ。これは…………。」

「ええ。朝まで。」

「「語り合いましょう。」」

二人はウルトラ談義で盛り上がっていた。

プラネテューヌに訪れたユーは新しい友と共に初めてのクエストに挑む。だがそのクエストでユーは恐るべき敵と出会う。

次回 超次元ゲームネプテューヌmk2 男の娘だった女神候補生

「初めてのクエスト 恐るべき巨大スライヌ」

これで決まりだ！

第三話『プラネテューヌの教祖』（後書き）

ユーちゃんの部屋

ユー「皆さんこんにちわ。司会及び進行のユーです。」

ファイ「どうも皆さん。ちゃんと火元を確認していますか？アシスタントのファイです。そして今回のゲストは！」

いーすん「こんにちわ皆さん。プラネテューヌの教祖を勤めていますイストワールです。へあっ！！（ウルトラなお面装備）」

ユー「あの教祖様その恰好は？」

いーすん「じゅわっち！！これはお土産のタイガー屋のタイガー焼きです。そしてこのお面は皆のヒーロー、ウ○トラマンです。」

ファイ「見た感じはどら焼きですが中は栗と小豆を練り込んだ生クリームですか。うーまーいーぞーです。」

ユー「美味しいです。とりあえずそのお面は没収です。」

ファイ&am p; いーすん「ウ○トラタッチ！！」

ユー「とりあえずあの二人は放置して今回はとある方より疑問の声があがったゼウスさんとオーデインの強さについてです。ではオーデインよろしくね。」

おー「任せてよ。とりあえずゼウスちゃんの力についてはひ・み・

つ。とりあえず私の事を説明するね。私は一つ的能力しか持っていないんだ。」

ユー「それで昔の私の三倍強さなんだ。それでその能力ってなに？」

おー「対象となる相手の能力の収集及び開放。」

ユー「二つあったような？」

おー「全部まとめて一つ的能力だよ。私と闘いを望んだり危害を加えようとしたら即その人物の能力を吸収するんだよ。そしてその力を自在に扱えるんだ。ユーちゃんの身体からほとんどの力を奪ったのはこれのおかげなんだよ。ちなみに吸収した能力はもう数えきれないかな。まあ私達には死の概念がないから殺そうとか問題外なんだよね。じゃあ私は帰るね。」

ユー「うーん。とりあえずオーディン達神はスルーする事が正しい行動だって事がわかったよ。では時間となりました。また次回もお楽しみに。」

ファイ「おやおや私をスルーするとはマスターもやる様になりましたね。」

いーすん「タイガー屋のタイガー焼きは一個350円で売っていますよ。」

第四話『初めてのクエスト 恐るべき巨大スライヌ』（前書き）

今回はネプギアが露出狂。モンスターは乗り物。などの作者の可笑しな妄想がふんだんに詰め込まれています。そういうのが嫌な人はご退陣を…。

作者はネプギアのスカートが短すぎるのではないかと思っています。

第四話『初めてのクエスト 恐るべき巨大スライヌ』

ユー s i d e

朝の寒さに目を覚ました私は見覚えのない部屋に戸惑いを覚える。しばらくすると自分が幼女神によって別世界のゲームギョウ界に飛ばされた事を思い出す。

寝起きでまだ頭が働いていないようである。ベッドから降りると洗面台にて顔を洗い何故か備え付けられていたビニールに入った未開封の歯ブラシに未開封の歯みがき粉を使用して歯を磨く。

勝手に使ってはいるが問題はないと思いたい。

「ふう、身だしなみは女神の基本だよね。」

私は歯を磨き終わると髪の乱れをないか確認して軽くブラシをかける。

「服装に乱れはないと。それにしてもガントレットとプレートアーマは外して寝ておくべきだったかもしれない。夜笠まで着て寝てしまった。」

まあ重さは殆どないんだけどね。服にも殆ど皺もない。着て寝たなら皺の一つも出来ると思うんだけど……。これもあの幼女神（笑）の加護（爆笑）おかげだろうか？

「……………ないね。とりあえず皆に朝の挨拶でもしてこようかな？」

身だしなみを整えた私は部屋を出て辺りを見渡す。そして一つの重大なる問題に気付く。

「み、道が分からない……………」

昨日はファイによる唐辛子粉末による地獄によって何がなんだかよく分からないうちに終わってしまった。そんななかで道なんて覚えられないわけがない。寧ろ覚えられる人がいたら出てきてほしいものだよ。

「あ、ユーちゃんお早う。昨日はよく眠れた？」

「ね、ネプギアちゃんは唐辛子かけられても道を覚えられるの!？」

「と、唐辛子? ユーちゃん唐辛子が食べたいの?」

「いや、ごめん。ちょっと慌ててただけ。寧ろ辛い物は苦手。」

「ユーちゃんは辛い物は苦手なんだ。……………覚えておかなくちゃ。」

何故覚える必要があるのだろうか? ま、まさかたこ焼きパーティーをする時に私のたこ焼きの中にからしを入れるつもりかそんな非道な行いができるなんてネプギアちゃん本当に女神なの! ?
そう突っ込もうとした私はまたもや重大なる問題に気付く。

「ネプギアちゃん。どうしてなの?」

「ん? どうかしたの?」

「なんでズボン穿いてないの! ?」

ネプギアちゃんの恰好、あと少しで下着が見えても可笑しくない。
どうしてズボンかスカートを穿いていないのだろうか? 寝ぼけて穿

きわすれたのかな？まさかあれはワンピースだとか：それはない。絶対にない。あんな短すぎるスカートやワンピースがあつてたまるものではない。そんな事はある得ない。信じない。信じるわけにはいかない。だが私に突きつけられた現実是非情な物だった。

「……………え？普通は穿かないと思うよ。これの下にスカートやズボンを穿いたら私可笑しな恰好になっちゃうよ。」

ふ、普通は穿かない！？まさかネプギアちゃんが露出狂だったなんて！？下半身を露出して性的興奮を覚える様な変態さんだったとは…。そういえば昨日もこの恰好だったけどみんな何も言っていなかったような。寧ろそれが普通のようだった。もしやネプギアちゃんはみんな公認の露出狂なのか！？

「ユーちゃんどうしたの？顔色が悪いよ。」

「ネプギアちゃんは どうして露出狂になっちゃったの！？」

「へ？えー！私は露出狂なんかじゃないよ！」

「な、ならどうして上しか着てないの？」

「こ、これはこういう服なんだよ。上下が繋がってるの。ワンピースみたいなものだよ。プラネテューヌでは流行りなんだよ。確かにちょっと短いかもしれないけどね。」

あ、あんな短いスカートがあるものなの！？

「待ってネプギアちゃんは確か三年間ギョウカイ墓場に捕まってい

たんじゃないの？」

「……さ、三年前から流行だったんだよ。」

その時私は重大なる事に気付いた。三年あんな露出狂紛いの服が流行。そしてそれが未だに流行し続けている。それから導き出される答えはプラネテューヌの国民全てが露出狂。この世界には変態はいないと思ったけどまさか国家全体が露出狂の変態集団だったとは。三年前かけてあの服が浸透していき今では露出するのがあたり前になってしまったのか。全ての元凶は私の横にいる女神候補生の露出狂なのだろう。いやきつとネプギアちゃんも被害者なんだよね。これからは一步距離をとって生暖かい視線で見守る事にしよう。

「ネプギアちゃんあんまり私に近づかないでね。」

「ユーちゃんは凄い勘違いしてると思うよ。」

その後ネプギアちゃんの30分に及ぶ説明を聞いた私はようやく自分の間違いに気付かされた。いやあれはあのスカートはいくらなんでも短かすぎたよね。そして今はネプギアちゃんの案内で昨日話し合いをした場所へ広間へと向かっている。

「ユーちゃんだって私とスカートの長さあんまり変わらないと思うよ。」

「そんな事はないよ。それに私はスパッツ穿いてるから。ほらっ。」

「うくっ!? ユーちゃんあんまり人前ではそういう事しちゃ駄目だよ。」

スカートをめくってなかのスパッツをネプギアちゃんに見せると何故か顔を赤くして目をそらされる。

「どうして？スパッツ見せたただけだよ。」

「そ、そのユーちゃんも女の子なんだから慎みをもたないと。変態さんになっちゃうよ。」

「変態さんから言われると説得力あるね。」

「もー、いつまでひっぱるのユーちゃん。私は変態じゃないよー！」

「ごめんごめん。」

ネプギアちゃんをからかいながら私は広間へと入る。

「お早うです。ギアちゃんにユーちゃん。」

「お早う二人とも。まったく朝から元気ね。」

どうやら既にアイエフさんとコンパさんは起きていたみたいです。コンパさんは微笑みながらこちらを見つめ、アイエフさんはこちらを少し呆れた様に見つめていました。

「お早うございます。アイエフさん、コンパさん。」

「……お早うございます。」

「二人ともよく休めたですか？」

「ぐっすりでした。」

自分でも驚く位に気がついたら朝だったし。

「わたしはちょっと寝つけないであんまり寝てないです。」

「そうなんですか？身体は大丈夫ですか？」

「身体は大丈夫です。ちょっと自己嫌悪に陥っていただけなので。」

ネプギアちゃん何故顔を赤くしてこっちを見るの？

まさか私は昨日ネプギアちゃんにやっぱ何かしていたのだろうか？
等と私が考えている時であった。

「まあーすたあー！！」

「……ファイ。見かけないと思ったけど随分とやつれたね。」

現れたファイまるでゾンビのようにフラフラしながらこちらに近づいてくる。目の下にはくっきりとした隈。髪はボサボサ。一瞬その姿にびっくりしたのは内緒である。

「昨日から一睡もしていません。マスター慰めてください。」

「……よしよし。」

抱きついてきたファイの頭を無表情で軽くポンポンと叩く様に撫でる。

「撫でて！！もっと撫でて！！！マスター！！」

「……よしよしよし。」

言われた通りにファイの頭を全力で撫で続ける私。手が摩擦で熱くなろうとも私は撫で続けてみせよう無表情で。

「あ、あのユーちゃん私も撫でて。」

「よしよしよし。」

「……えへへ。」

そしてファイを撫でている手とは逆の手でネプギアちゃんの頭を撫でる。

「どうして私は朝から二人の頭を撫でなければいけないんでしょうか？正直腕がだるいです。」

「それで、私はどこから突っ込めばいいのかしら？」

「アイちゃんの頭は私が撫でてあげます。だから拗ねちゃ駄目ですよ。」

「あ、ありがとう。って私はもうそんな年じゃないわよ！！ほらあんた達もいい加減にしないさ。」

コンパさんがの手を振り払いアイエフさんは私からファイとネプギアちゃんを引き離す。

「はっ！？私は一体何をしてたのでしょうか？」

「ジャリジャリ娘よくも私の朝の至福の時間の邪魔をしてくれましてね。マスターの撫でテク舐めないでくださいよ！？マスターが頭

を撫でる時的確に頭のツボを押してくるんですよ。凄く気持ちいいんですよ。」

「私はそんなテクニックをいつの間に手に入れたのであろうか？」

「それは是非私も味わいたいものですね。」

「おや教祖様いたんですか？」

「いたんですよ。」

いつの間にやら教祖様が私の背後でにこやかに微笑んでいました。この人にはどうやら気配がないようである。

「教祖様も撫でましょうか？」

「ありがたいお話ですがそれはまた別の機会にしましょう。」

「それもそうですね。」

「では皆さん集まってください。今から重要なお話をします。」

「私とマスターの挙式はいつにするかという「黙りなさい。」「すいませんでした。」

ファイの頭を叩きながら教祖様の話に耳を傾けます。

「それでイストワール様お話しとは？」

「この世界をマジエコノヌから取り戻す為に皆さんにやってもらいたい事です。」

「マジエコンヌから取り戻す。どうすればいいんですか!？」

「まず皆さん五人にはシェアを集めてもらいます。シェアを集められるのは女神及びネプギアさん、ユーさんをはじめとした女神候補生だけです。」

「私とユーちゃんですか?それに私達以外にも、女神の妹が?」

「え?私も数に入ってるんですか?」

私はいつの間にか世界を救うパーティーの仲間になされた様である……。

「その通りです。人々のシェアを少しずつ取り返していけば、犯罪組織も、それに属する人達も弱体化していくはずです。」

「お姉ちゃんの変わりに私がシェアを……。できるのかな?でもユーちゃんと一緒になら……。」

「あの、私への確認とかはないんですか?」

「そんな悠長な作戦で大丈夫なんですか?こっちがシェアを取り戻すより、向こうがシェアを広める方が早かったら意味がないですし。それにこんなよくわからない変な奴ら私は信用できません!!」もしかして私の発言はスルーされているのかな?

「黙って聞けよジャリ。」

「なんですって!？」

「アイエフさん落ち着いてください。ユーさんもファイさんも信用に値する人達です。背が150cm以下の美少女に悪い人はいません。」

そう言えば私は身長148cmだったっけ？

「そうですアイエフさん。ユーちゃんは可愛くていい娘です。ちょっとずれてて可笑しな事を言う変わった娘ですけどとても美少女なんです。悪い娘なわけがありません！」

「ネプギアちゃん。それは貶しているの？それとも馬鹿にしているの？」

さつきからネプギアちゃんの言葉に胃を鷲掴みにされるのは気のせいだと思っています。

「そしてもう一つ。各国にいるゲームキャラの強力を仰ぎ、その力を借りるのです。」

ゲームキャラ？どこかで聞いたような？

「古の女神様達が生み出した、世界の秩序と循環を司る存在です。ゲームキャラ達は各国の土地に宿り、その土地に繁栄をもたらし続けています。そして有事の際には、その時代の女神を助け、悪を滅ぼすだけの力を秘めています。」

そういえばあの幼女神がファイの事を人型ゲームキャラとか言っていた様な？

でもこの私の胸の中でハアハア言っているファイがそんな凄い設定をもったキャラだなんて……………」

「……………ないよね。寧ろ信じたくないよ。」

「そんな人達がいただなんて私知らなかったです。」

ごめんなさいコンパさん。私は知ってました。

「なら早く連れてきましょう！」

「アイエフさん残念ですがゲームキャラ達の正確な所在は私の方でも掴めていません。」

ここにいます。ここで私の胸の中でハアハア言ってる人がそうなんです。そう言ってもきつと誰も信じてはくれないよね。

「現在こちらでプラネテューヌのゲームキャラの行方を追っています。その間に皆さんにはプラネテューヌのシェアの回復をお願いできますか？」

「あ、あの現在のプラネテューヌの状況などを聞いてもいいですか？シェアの量なども聞いていいでしょうか？」

「「……………」」」

どうしてさっきから誰も目を合わせてくれないんですか？どうして誰も私の話を聞いてくれないんですか？私は何か間違った質問をしたのでしょうか？

「それでは皆さんお願いします。」

それとネプギアさんこれを。」

結局私の発言は全てスルーされるようである。そして教祖様よりネプギアちゃんに何かが渡される。

「これは？」

「Nギアです。便利な機能が満載の、万能デバイスなんですよ。超小型カメラ搭載で相手に気付かれる事もなく盗撮だって可能です。そして超小型盗聴器内蔵で相手の恥ずかしい会話だって聞き放題です。きつと今のネプギアさんには必要不可欠な物だと思ひまして。」

「……………はい、ありがとうございます。」

「どうしてそんな意味深な顔でこっちを見るのネプギアちゃん？」

「これを使えばユーちゃんのあんな姿やこんな姿が……………」

「まさかネプギアちゃん私がお菓子を隠した場所やへそくりをした場所を探し出すつもりじゃあ!？」

「マスターやはり貴女はどこかずれてますね。」

その後私達はシェアを回復する為にクエストを受けにギルドへと向かいました。ちなみにファイはいつの間にか意識を消失していたので私が使った部屋の寝台に寝かせてきました。何やら昨晚教祖様と語り合っていたせいで寝不足だったとの事。その割には教祖様はもの凄く元気だったのは何でだろう？

「ここがギルドかぁ。私の知ってるギルドとは大違いだね。」

「ユーちゃん知ってるギルド。ならユーちゃんの世界のギルドって事だね。どんなところなの？」

「一日一回はダイナマイトで吹き飛んで、ギルド内部ではいつも誰かの悲鳴がこだましているね。」

「…ユーちゃん。大丈夫だからね。ここではもう誰もユーちゃんを傷つけないから…。だからもうそれは忘れていいよ。」

「ここからが本番なのに。まあいいけど。」

「ギアちゃん、ユーちゃん受けるクエスト決まったですよ。」

「どんなクエストなんですか？」

「バーチャフォレストにでるスライヌの討伐ですよ。」

「スライヌ。所謂お約束だね。」

「大丈夫かな私。」

「ネプギアちゃん大丈夫だよ。こんな序盤でスライヌイベントはないから。」

「ユーちゃんはさっきから何を言っているんでしょうか？」

「さあ私に聞かれても困るです。」

心配して言ったのにその扱いは酷いと思います。

「ユーあまり先走りするのはどうかと思うわ。貴女のツツコミは的確よ。でもね先回りし過ぎなのよ。相手に理解されないツツコミはただのボケよ。いや寧ろそれ以下よ。」

「アイエフさんは何を言ってるのでしょうか？」

「私に聞かれても困るです。」

なんだかんだでバーチャフォレストへと私達は向かいます。

「お、早速いたわねスライヌ。三人とも準備はいい？」

「はいです！」

「は、はい。」

「四人がかりでスライヌ相手にすると何か弱い者苛めみたいですね。」

「ユー、それはツツコミを入れるには危険すぎる箇所よ。私はね貴女をツツコミとしては認めているわ。でもねそれ以外は貴女の事を認めていないわ。だからこのクエストで私を認めさせてみなさい。」

「……アイエフさんって可愛そうな人なんだねネプギアちゃん。」

「三年前はあそこまでなかったんだけど。」

「…………アイちゃん。」

「さあ行くわよスライヌ！覚悟！」

戦闘開始。戦闘描写？必要ならいいますけど。

私達は四人がかりでスライヌさんを粉碎！玉砕！！大喝采！！！しただけですよ。だってこのメンバーでスライヌ相手にしたらどうなるか位皆さんだってわかるでしょう？

「やったです。大勝利です。」

「やりましたー！」

「なかなかね。ユーあんたなかなか良い戦いするじゃない。スライヌに一回も攻撃を許す事なく踏み殺すなんて、素晴らしかったわ。」

「無表情でスライヌを踏み続けるユーちゃんとっても素敵だったよ！」

「何か違う気がするです。」

「倒される前に倒す。私はどんな相手にでも本気を出す。」

『ヒーン！』

「良い心意気ね。だけど貴女一体何に跨がっているのかしら？」

『ヒーン。』

「暴れ馬がいたから乗りこなしてみました。しかもただの馬じゃないんですよ。羽がついてるんですよ。もしかこれはペガサス！」

『ヒヒーン。』

「違うわユー。それはペガサスなんて可愛い物じゃないわ。馬鳥っていうモンスターよ。」

「そうなんだ。よしよし。」

『ヒヒーン。』

きつと私の騎乗スキルはSなんだよ。

「なんなのあれユーちゃんに跨がられて、頭を撫でられて……私だってまだ跨がられた事ないのに。」

「ぎ、ギアちゃん何か黒い物が出てるですよ。」
あれはオーラですよ。

「スライヌを寄せ付けない戦闘力。モンスターを意図も簡単に操るだなんて認めざるえないわね。」

「暴れ馬を乗りこなすのはなれてますから。」

スライヌ退治が予想以上に暇だったので暴れ馬を乗りこなした私は詰めが甘かったようでした。
スライヌに一匹だけ生き残りがいてそれを見逃してしまったようである。

『ぬ、ヌラー!!』

「スライヌが一匹逃げたです。」

「ま、待ってくださいーい。」

「追うわよユー!」

「わかりました。行こうかキン馬鳥。」

『ヒヒーン。』

キン馬鳥この子の名前です。深くは考えないでね。私はキン馬鳥を走らせてスライヌを追います。スピードはお世辞にも早いとは言えませんでした。

「手間かけさせてくれたわね。でもようやく追い詰め…ん?」

『ヌラー!!』

「スライヌさん達がいっぱい集まって来たです。」

「…ユーちゃん早くそれから降りて!」

「わ、分かったから剣を退けて。」

何故か目に光を灯さないでこちらに剣を向けるネプギアちゃん。私はそのネプギアちゃんに言い様のない恐怖を感じてキン馬鳥より降りる。

「ちょっとあんた達何やってんのよ!?」

『ヌーラー!!』

「スライヌさんが大きくなったです。」

「ファイに見せたら喜びそうな光景だなあ。」

「これは手間取りそうね。…そうだな、ネプギアあんた変身しなさい。」

「へ、変身？」

「まさかネプギアちゃんは仮面○イダー。仮面ラ○ダーネプギアだったんだ。」

「違う違う。女神化よ、女神化。リハビリよりハビリ。こっち戻って来てから一度も女神化してないでしょう？ここは女神化してちゃっっちゃとやっつけなさい。」

「アイちゃん絶対自分が楽しただけです。」

「戦う…女神化して、戦う…ううっ。」

「おや？ネプギアちゃんの様子がおかしいぞ？」

「だ、ダメ…できない…怖い…っ！」

「ユーちゃんギアちゃんは進化しないです！」

「コンパさん不謹慎ですよ。大丈夫？ネプギアちゃん？」

「久々にネタに乗って見たらこんな目に合うなんて…。」

「タイミングが悪かったわねコンパ。」

「ネプギアちゃんお腹でも痛いのか？」

「女神化できない。女神化して闘えないよ。」

私はその言葉にかつての自分を重ねてしまう。

回想シーン

これはとある史書へんたいとの思い出（悪夢）

「ユウ、どうしたのですか！？早く女神化して闘ってください！！」

「できない、できないよ。女神化して闘う事なんてできないよ。」

「何を言っているのですかユウ！？早くしないとモンスターが人々を襲ってしまいますよ。」

「こんな人が大勢いるところであんな破廉恥な恰好になんてなれないよ。」

「がんばってくださいよユウ！主に私の目の保養の為に！！」

「そっちが本音か！！」

「カモーン！」

回想end

「ネプギアちゃん、よかったよネプギアちゃんが羞恥心を持っています。」

「…………え？なんの話し？」

「私もね昔は女神化するの恥ずかしかったよ。どうしてこんな変な恰好してまで闘わなくてはいけないのかって。でもね恥ずかしがってたら皆を守る事はできない。そう気づいたんだ。」

「あの？ユーちゃん何を言って…………「今は見えてネプギアちゃん。」は、はい？」

「行きます。プロセスサユニット装着！！女神候補生シルバーシスター見参！」

私の身体を銀色に輝くプロセスサユニット、シルバmk2が包む。

「何かいつの間にか話が進んでいるわね。」

「ギアちゃんは女神化するの恥ずかしかったんですね。」

「それもそうよね。あんな水着みたいな変な恰好。」

「へ、変！？」「ごめんねネプギア。私あんたに無理強いしていたのね。」

「わ、私はなんて言えがいいんでしょうか！？」

「キン馬鳥貴方の力を貸してくれる？」

『ヒヒーン!』

「刃馬! 一体!! 行くよキン馬鳥、今こそ駆け抜ける時!」

刃馬一体。ただキン馬鳥に跨がるだけなんだけどね。

『ヒヒーン。』

「刮目してください! これが私達の! 乾坤一擲の一撃です!!!!」

キン馬鳥が私を乗せて駆け出す。そして私は馬上で菊壺紋字のもう一つの姿を顕現させる。

斬艦刀・菊。通常は日本刀の姿（菊壺紋字）をしているが、攻撃時は柄が伸び、鐔が展開して刀身を液体金属で出来た刃が包み込む。液体金属故刀身は伸縮自在で様々な使い方が出来る万能武器である。これを知り合いに見せたところバルディツ○ユだ! ザ○バーだ!! ！とよく分からない事を言っていました。

「奥義! 斬艦刀・菊!! 逸騎刀閃!!!!」

大型スライヌとすれ違い様に斬る。ただ斬るのではない。軽くスナップを効かせる事が重要なのである。

『ヒヒーン!!!』

「我らに断てぬものなし:!!」

爆散するスライヌ。そして悠然とキン馬鳥に跨がる私。これは絵に

なるね。

「……凄いです。」

「一撃であのスライヌを倒すなんて。」

「……ユーちゃんのあの剣、分解して改造してみたいな。」

皆さんこのネプギアちゃんの言葉覚えていてくださいね。

ユースide

「またねー！キンちゃん。」

『ヒヒーン。』

闘いを終えた私はキン馬鳥に別れを告げる。あいつは良い奴でしたよ。

「たいした物ねユー。これは認めないわけにはいかないわね。」

「ありがとうございますアイエフさん。」

「ユーちゃん怪我はないですか？」

「大丈夫ですよコンパさん。」

「……ユーちゃん。」

「ネプギアちゃん見ていてくれた？」

「え、あ、うん。」

「それでどうだった？何かを感じなかった？」

「え、ええと、ユーちゃんとっても可愛かったよ。」

最近可愛いとか言われると嬉しいとか思ってしまう自分がいる。

「……他には？」

「そ、そんな急に言われても。私にはユーちゃんが何を言っているのかよくわからないよ。」

「だってネプギアちゃんは女神化した姿を見られるのが恥ずかしくて女神化しなかったんだよね？」

「ち、違うよ。わたしは別に女神化した姿が恥ずかしいんじゃないってね。」

「女神化した姿が恥ずかしくない!？」

その時私は全てを理解した。

女神化恥ずかしくない↓別に見られても構わない↓寧ろ見せたい!!
ネプギアちゃんは露出狂

「あ、あのユーちゃんどうしたの？」

「私にはネプギアちゃんを救う事ができないんだね。」

「ゆ、ユーちゃんどうして離れていくの？」

ゆっくりと後退りをする私。それを見て戸惑いを隠せないネプギアちゃん。

「ごめんね。友達に露出狂がいるなんて噂されたくないんだ。だから…ごめんね…!!」

ネプギアちゃんに背を向けて走り出す私。そしてそれを追いかけるネプギアちゃん。

「ま、待ってよユーちゃん!! やっぱりユーちゃんは勘違いしてるよー!!」

その後私はネプギアちゃんに三時間に及ぶ説明を受けて一応ネプギアちゃんが露出狂ではないという事を納得した。ただどネプギアちゃんのあのスカートはやっぱり短すぎると思います。

次回予告

教祖イストワールにより突き止められたゲームキャラの所在。そこにユー達は向う。だがそこでネプギアに試練が訪れる。ユーは苦悩するネプギアを助ける為に……。

次回超次元ゲームネプテューヌmk2

男の娘だった女神候補生

第五話『女神候補生二人によるスーパーフルボッコタイム 被害者

は下っ端』

運命さだめの鎖を解き放て!!

○イルズ風スキット
スパッツ二代目

ユー「ネプギアちゃんよかったらこのスパッツ使う？」

ギア「これってユーちゃんが使ったスパッツ！」

ユー「いや、夜笠の中にあつたスパッツで「ゆ、ユーちゃんがは、穿いたスパッツ……!! 使用済みのスパッツ!!」……………」

ギア「ありがたく使わせてもらうね!」ネプギアは夜笠の中にあつた謎のスパッツ（黒）を装備しました。

ユー「……………まあいいか。」

第四話『初めてのクエスト 恐るべき巨大スライヌ』（後書き）

ユーちゃんの部屋

ユー「こんにちわ皆さん。司会及び進行のユーです。」

いーすん「皆さんこんにちわ。プラネテューヌの教祖を勤めるイストワールです。今回は死んだ様に眠っているファイさんの代わりにアシストを務めさせていただきます。」

ユー「では今回のゲストはこの人です！」

アイエフ「諜報部に所属するアイエフとは私の事よ！」

アイ「これ差し入れのコンビニ『ろろーそん』の肉まんよ。出来立てを買い占めて来たわ。」

いーすん「熱くて美味しいです。はふはふ。」

アイ「それで私は何を説明すればいいのかしら？」

ユー「と、特に今回はないですよね。」

いーすん「そういう回もありますよ。とりあえずこの山積みの肉ま

んをかたづけましょう。」

ユー「こ、これは確かに多いですね…。」

アイ「肉まんあるだけ売りなさいっていったらこれなのよ。」

いーすん「喋る暇はありません。食べますよ。」

ユー「次回もお楽しみに。はふはふ。」

三人「はふはふ。」

第五話 『女神候補生二人によるスーパーフルボツコタイム 被害者は下っ端』

世間はクリスマス。そんな中トマトは忙しい。故に更新は年明けまでほとんどないかもしれませんがご容赦ください。

第五話『女神候補生二人によるスーパーフルボッコタイム 被害者は下っ端』

ユー side

現在私達はバーチャフォレストの最深部に訪れています。教祖様のお話によるとここにプラネテューヌのゲームキャラがいるそうなんです。

「このダンジョン私気に入りました。」

「もしかしてファイは森林浴が好きだとか？意外な趣味だね。」

「いえ、燃やしやすい物がたくさんあるなと思ひまして。空気も程よく乾燥していますし。」

「お願いだから下手な事はしないでね。」

山火事とか洒落にならないから。辺りを見回しながらにやにやと笑うファイに私は危機感を抱いていました。

「何かそれっぽい物があるわね。」

アイエフさんが何かを発見したのか歩みを止めて虚空を指差す。たぶんあそこにゲームキャラさんがいるのであろう。

「誰かいる？」

アイエフさんが指さした方向を見ると何やら物騒な得物を持った肌の色が病氣かとも思えるほどに悪い人がいました。

「ゲームキャラを壊そうとしている！？やめてください！！」

ゲームキャラを破壊しようとしている人物に走り寄るネプギアちゃん。遅れて私達も向かいます。

「ああ？誰だテメェら！？邪魔すんじゃねえよ！」

「おやおや口の聞き方が悪いですね。燃やしてあげましょうか？」

「だから引火するから止めて。それで貴女はそのゲームキャラをどうするつもり？」

「壊すに決まってるんだろ？これは、我々マジエコンヌにとって目障りなヤローだからな。」

「という事はアンタマジエコンヌの一味なわけ？」

「へっ、教えてやる義理はネエが…。特別に教えてやるよ。耳かっぽじってよく聞きな！」

「前置きはいからさっさと名乗ってくれませんか？」

「ちょっとファイ黙って話が進まないから。」

「モゴモゴ（口を塞がれている為モゴモゴ）。」

ファイの口を両手で後ろからふさぎつつ肌の色が悪い人の話を聞きます。

「なんだてめえら？まあいい。犯罪組織マジエコンヌが誇るマジパ
ネエ構成員、リンダ様たあ…。」

「構成員？てことは下っ端？」

「下っ端さんです！」

「どうしようもないクズですね。」

「ユーちゃん見てよあの私より肌の露出が多いよ！だからあの
の方が露出狂だよ！」

「ネプギアちゃん、わざわざ忘れかけていた事を自ら掘り返さな
くてもいいのに…。」

「てめえら人の事無視すんじゃないやねえよ！」

「あ、ごめんなさい。」

なんで私が謝ってるんだろうか？

「それでどうしようもないクズさん。ここで私に焼き殺されるか、
マスターの可愛らしさに萌え死ぬどちらがいいですか？」

「ああ！？わけわからねえ事言ってるんじゃないやねえよ！人の事馬鹿に
しゃがって。」

武器を構えてこちらを威嚇する下っ端。動きは素人臭いけど何があ

るかわからない。相手の動きを見てから行動を起こすべきだね。私は菊壺紋字を夜笠の中から取り出して正面に構える。

「何よやる気？下っ端のくせに生意気ね。行くわよコンパ！」

「はいです！」

何も考えず下っ端さんへと向かっていくコンパさん、アイエフさん。彼女達は馬鹿なのだろうか？

「ま、待ってください。敵の実力も把握できていないのに突っ込むなんて無謀です！」

「どうやら手遅れのようにですよマスター。」

「なんだ口のわりには大したことねえな！」

「くっ！下っ端の癖になんでこんなに強いのだよ！」

「これもマジエコンヌのシェアが強くなっているせいですか！？」

あっけなく下っ端に倒される二人。下っ端でこの強さ。マジエコンヌがシェアのほとんどもを得ているというのはどうやら本当のようだね。でもあれ（下っ端）程度なら…。

「順番になぶり殺しにしてやるよ！先ずは…てめえだそこのチビ！」

「だってさファイ。」

「いえ私ではないですよ。」

「だってさネプギアちゃん。」

「あれ？私の事なのかな？」

「てめえだよ白髪！」

「いやいや待ってよ。私はチビじゃないよ。」

「ごちゃごちゃうつせえんだよ！」

「まあいいや。私は背の高さなんて気にしない。とりあえずファイあいつ二人でリンチにしようか？」 「めちゃくちゃ気にしてるじゃないですか。別に構いませんが。」

「ユーちゃんは、ユーちゃんは私が守ります！ええい！！」

「邪魔すんじゃないよ！」

「キャー！！！」

「なんですかあのクソ虫？勝手に突っ込んで勝手にやられましたよ。」

ファイと二人がかりであの下っ端をなぶり殺しにするつもりだったんだけど何を思ったのかネプギアちゃんが勝手にやられてしまった。最近の若者は何がやりたいのだろうか？ちょっと注意しなくちゃ。

「…………ごめんファイちよっと時間稼いでくれるかな？」

「何をするつもりかは知りませんができるだけお早めにお願いしま

すよ。」

「…頼んだよ。ネプギアちゃん!!」

ファイに足止めを任せて私は膝をついているネプギアちゃんのもとに駆け寄る。

「ユーちゃんごめん。私やっぱり怖いよ。闘うのが、女神化して闘うのが怖いよ。」

「ネプギアちゃん。」

「また負けたら、また負けて皆をユーちゃんを傷つけちゃったら…。そう思ったら私……。できなくて。」

ネガティブだ。今のネプギアちゃんはネガティブネプギア。略してネガギアちゃん。とりあえず励ませば良いのだろうか？

「大丈夫だよ。ネプギアちゃんが思っている以上に皆強いよ。ほらコンパさんとアイエフさんを見てよ。」

「……………」

「……………」

コンパ、アイエフ下っ端により戦闘不能。気絶中。

「私のせいだ。私のせいで二人が傷ついて…。」

「やばい逆効果か。ならほらファイを見てよ!」

「燃えなさい。ほら早くしないと焦げちゃいますよ？」

「うわっ、あちい！てめえ卑怯だろうが！！」

「燃えてしまいなさい！！」

「……………」

下っ端をかなり追い詰めていました。一応周りに火がつかないように火球の威力と大きさは加減されている様である。下っ端はあちこちが黒焦げでしたけど…。

「そっか私いらない子なんだね。私なんかいなくてもどうにでもなるんだよね。なんの役にも立たない私なんか…。」

「うわっ！さらにネガティブに！！ああファイを選択した時点で間違えだったのか。」

「生まれてきてごめんなさい。」

「どうする。どうするの私。この限りなくネガティブなネプギアちゃんを救う方法なんて。……はっ！？」

その時私の頭の中にかつて一人の妹に言われた事が思いだされる。

回想シーン

それは髪の毛二つ結びにしている黒い妹との邂逅…。

「お兄様に悲しみに捕らわれた女の子を簡単におとす方法を教えてあげるわ。」

「結構だ。そんな事より課題は終わったのか？」

「とりあえず抱きしめてキスすればいいのよ。」

「スルーするなよ。っていうかいきなり抱き締めたりキスしたら痴漢だろう。」

「そうねえ。なら抱きしめつつ守るよ！君はボクが守るよ。的な事を言えばいいんじゃないかしら？」

「はいはい。とりあえず課題を終わらせなさい。じゃないと晩御飯は抜きね。」

「お兄様の裏切り者オオオオオオオオオオオオ！！」

回想シーン終了

「やるしかない。正直これしたら何がどうなるか予測つかないけどやるしかない。今の私にはもう他に何も思い付かない！！ネプギアちゃん！！」

「ゆ、ユーちゃん！？ど、どどどどうしたの！？」

とりあえずネプギアちゃんを軽く抱きしめる。

「大丈夫だから。」

「え？」

「ネプギアちゃんは私が守るから。」

「ユーちゃんそれって……。」

「だから立ち上がって!!」

頭の中に思いついたセリフを適度に呟く。下手な誤解はないはずだ
と思いたい。

「……うん!」

「良い顔になったね。いける?」

「うん。大丈夫だよ。もう誰も傷つけない。だから!」
ネプギアちゃんの顔にはもう迷いはなかった。瞳には強い意志を宿
していました。これなら大丈夫だね。だからネプギアちゃんに託
そう。

「なら私からの餞別。私の力半分あげるね。」

私はネプギアちゃんをの髪を掻き分けておでこへとキスをする。別
に邪な下心などはなく、私の中にあつたシェアを渡す。

「……………!?!」

私のシェアを受け取りネプギアちゃんの身体が光に包まれる。これ
は女神化……。そしてこれが……………。

「これがネプギアちゃんの女神としての姿。」

白のプロセッサユニットを身に纏い降臨したのはプラネテューヌの女神候補生パープルシスター。

「プロミネンスドロップ！」

そこに丁度炎を身体に纏わせたファイが下っ端にドロップキックを決めてネプギアちゃんの足元に転がす。

「がはああああ！！く、くそ覚えてやがれよ！」

「逃がしません。覚悟してください！私は負けません！」

自分の不利を感じた下っ端。だけど逃げられない、下っ端の背に立つのは一時的とはいえシルバーのシェアを纏った存在。「お前女神だったのか！？や、やべえこれじゃあ死じまう！」

下っ端が死を覚悟するのは自然の摂理。下っ端を間にして立つのは真紅の炎を纏った炎魔と絶望より立ち直った紫の夜叉。

「ファイさん離れていてください。後は私が……殺ります。」

「良い顔になりましたね。クソ虫、いいえ昇格させてあげましょうダメ虫。」

「な、なんだろう。このままじゃあ大変な事になってしまう様な気

がする。」

そして私はそんな二人のやり取りに言い様のない危機感を感じていました。

「はああ！」

容赦なく下っ端を斬りつけるネプギアちゃん。なんだろう凄く怖い…。

「がはあ！？や、やめろ！」

「いいえやめません。ユーちゃんを傷つけようとした貴女はここで死んでください。」

「な、なんだよ。こんなやべえのがいるなんて聞いてねえよ！」

「あんまり喋らないでください。ユーちゃんの綺麗な声が台無しです。MPBL！！」

ネプギアちゃんのMPBLより放たれたピンク色の砲撃がマジエコンヌの下っ端は吹き飛ばしお星様にしてしまう。な、なんて恐ろしい兵器なんだろう…。

「逃しましたか…。」

「わ、私は何も見てない何も聞いてない！！」

ネプギアちゃんの下っ端さんを冷たく睨み付けていたあの目は強者の目…。

「痛たた。何よいつの間に終わってたわけ？」

「ギアちゃん女神化してるです！もしかしてギアちゃんが下っ端さんを倒したですか！？」

いまさら目覚めたんですかお二人。なんでもいいからあのネプギアちゃんを落ち着かせてください。

「はい。でもファイさんとユーちゃんが助けてくれたおかげです。」

「謙遜をする事はありません。貴女はよくやりました。私とマスターの次くらいに。」

「それでユーちゃんはさっきからどうして黙ってるんですか？」

「本当に何も見てないんです！」

見てないから殺さないで…。

「あ、あのユーちゃん！」

「ネプギアちゃん…。」

や、やばいころされる…。

「下っ端さんに勝てたのはユーちゃんのおかげだよ。本当にありがとう。」

「あ、ええと。気にしないで困った時はお互い様だから。」

「それと私ユーちゃんの気持ち受け取ったから。」

「え？なんの事？」

「これからはユーちゃんの恋人として恥ずかしくないように頑張るよ。」

「」「はぁ！？」「」

「あの時のユーちゃんの告白とキス本当に嬉しかった。」

「マスター詳しく聞かせてもらって良いでしょうか？内容によっては私はヤンデレ化します。」

「ごめん。私にも何がなんだか。」

ファイに服の襟元を掴まれガンをつけられてしまう。だが一体何がどうなっているのか教えてほしい。

「ギアちゃん詳しく聞かせてくださいです！！」

「ちょっと恥ずかしいですけどいいですよ。」

妄想シーン

あれは私が下っ端さんに歯がたたず絶望にうちひしがれている時で

した…。

『また負けたら、また負けて皆をユーちゃんを傷つけちゃったら…。そう思ったら私……。できなくて。』

『ネプギアちゃん大丈夫だよ。だってネプギアちゃんは私が好きになった人なんだから…。』

『ユーちゃん…。』

『私の想いをネプギアちゃんに託すから闘って。私の愛した女神候補生。』

『ありがとうユーちゃん。私闘うよ。ユーちゃんの恋人として…。』

『ありがとうネプギアちゃん。……。大好き。』

』

そして自然と私とユーちゃんの唇は重なったんです。

妄想シーン終了

ユ一s i d e

「その後私はユーちゃんの想いを乗せた一撃で下っ端さんを撃退したんです！」

「どうしてこんな事になったの？」

「さあ？でもなんだか面白いのでスルーします。どうせキスしたのだって頬とかでしょう？」

「ごめんおでこにしました。」

「意気地がないですねマスター。」

そんな時……………。

「MPBLー!!」

ピンク色の砲撃が私とファイを狙って撃ち込まれる。反射的に私は横飛びにて避ける。ファイは何か円盤状の物で防いでいました。

「ね、ネプギアちゃん!？」

「ダメ虫貴女は何のつもりですか!？」

「ユーちゃんを悪く言わないでください!そんな事言うならファイさん貴女を消去した。」

その時のネプギアちゃんの目は冷たく光っていました。

「私にまで直撃するところだったんだけど…。」

「本当ですよ。このゲームキャラがいなかったら私も危なかったですよ。」

そうそう。そのMPBLで真っ二つに割れたゲームキャラが……………。
…。

「ちょ、ちょっとファイ!ゲームキャラさんが真っ二つに!」

「おお！これはこれは。くっ！？あの下っ端なんていうことを！」

「いやいや、ファイがやったんだよね！」

「まあどんまいとしか言い様がないですね。」

「うわぁ最悪だよ。教祖様になんて言えはいいの？」

「MPBLで壊れたと言えはいいじゃないですか。」

「ああもうやだよ。」

『大丈夫ですよ女神候補生。』

「この声は？」

『まさか眠りに就いていた間に破壊されてしまうとは。なんたる不覚でしょう。』

「貴女はまさかゲームキャラさん？」

『はい。その通りですプラネテューヌの女神候補生。私の器は破壊されてしまいました但那その力を貴女に託します。』

「あ、あの私はプラネテューヌの女神候補生ではありません。」

『そうなのですか？ではプラネテューヌの女神候補生は何処に？』

「あそこですよ。」

「それで私とユーちゃんは永遠の愛を誓いあったんです。アイエフ

さんとコンパさんも祝福してくれたじゃないですか!!」

「ううつ、ギアちゃん一体どうしたんですか!？」

目に涙をためるコンパさん。私も泣きたいですよ。

「三年前私はあんた達を見殺しにしてしまったわ。それから私は二度とそんな事がないようにと思ってきたわ。でも今は関わりたくすらないと思っているわ!」

その気持ちはわかります。でもアイエフさんも私も遅いんですよ。

『……………。』

「あ、あのゲームキャラさん？」

『名も知らぬ女神候補生。貴女に私の力を託します。』

「……………え!？」

ユーはパープルディスクを手にいれました。

「どうして私に？」

「あれと比べたら…仕方ないですよ。」

「ギリギリだったわね。」

突然肩を組んでくるアイエフさん。

「でもこれでゲームキャラさんの力が手に入ったですよ。」

泣きながら笑っているコンパさん。

「では教会に帰りましょうか？」

私は見てみぬ振りをする。余計な事には踏み込まないそれがこのギョウカイの常識。

「そうね。でもユー、貴女はまだ終わってないわ。」

「……………え？」

「ユーちゃん!!」

突如私の元へと突っ込んでくるネプギアちゃん。肩を組んでいたアイエフさんは弾き倒されました。コンパさんは号泣しています。だけど私にはそんな事気にしている暇はありませんでした。

「ね、ネプギアちゃん!? 急に抱きついてきてどうかしたの?」

「ユーちゃん柔らかいね。それに良い匂いがする。」

「い、いや。ネプギアちゃん離して!」

背中を撫でまわされるといふ嫌悪感に耐えきれなくなった私はネプギアちゃんを引き剥がす。

「ご、ごめんね。抱きついてたらキス出来ないもんね。」

「え、何なの? ネプギアちゃんの中ではどんな事になってるの!??」

「あ、ごめんね。キスは二人きりの時じゃないと恥ずかしいって言

ってたよね。」

「違う！私そんな事言っていないよ！それはネプギアちゃんの頭の中の話しだよね！？アイエフさんコンパさん助けて！！」

「彼女達なら帰りましたよ。今から朝まで飲み明かすとの事です。後の事は頼むとの事です。」

「押し付けられたか…。ならファイが！」

「ごめんなさいマスター。何やら面白い展開なので放置します。」

「図ったな謀ったなファイ！！」

「マスターは可愛かったですけれどマスターの総受け体質が私の想像以上に面白いのがいけなかったのですよ！！」

「ユーちゃんこれからはずっとずっと一緒だよ。ユーちゃああああああああああああん！！！！」

「いやあああああああああ！！」

この日私は狩られる者の気持ちを再確認しました。

次回予告（今回はいつもと少し変えてみました。）

お願いします！助けてください！

いや寧ろどうして迷えたのか私が聞きたいわよ。

ユニちゃんまた会えると思っていた。

これで三回目よね。貴女と会うのは。そうよねユー。

ユーちゃんを出してください！！断ると言うならMPBLー！！

次回超次元ゲームネプテューヌmk2

男の娘だった女神候補生

『ラストイシヨンの女神候補生』

ユーあんたは私がプラネテューヌの女神候補生から守ってみせるわ
！！

第五話『女神候補生二人によるスーパーフルボツコタイム 被害者は下っ端』

ユーちゃんの部屋じゃなくてファイの部屋

ファイ「皆さんこんばんわ。マスターの代理を勤めますファイです。マスターは逃亡中です。理由は…。」

ネプギア「どこなの！？ユーちゃんはどこにいるんですか！？出して。出さない。出さなきゃ可笑的い。出すべきですよ。出さない！！！！！！」

ファイ「これが原因です。あのダメ虫は笑顔で先ほどのセリフを言っていますから。さすがのマスターも恐ろしくて逃げたようです。」

ギア「ファイさんユーちゃんは何処にいるんですか？」

ファイ「さあ？とりあえずコーナーを進めましょうか。」

ギア「いや！！」

ファイ「はい？」

ギア「ユーちゃんがいらないなんていやあああああああああ
ー！！！！」

ファイ「待ちなさい！密室でそんな危険な物を発砲しないでくだ…
……………」

スタジオ崩壊の為にコーナーはここで終了。皆さん良いクリスマス

を…。

閑話 ネプギアの恐るべき魔改造（前書き）

そういえば的な感じで思いついた閑話。短くて駄文なのでご注意を
…。

閑話 ネプギアの恐るべき魔改造

ユー side

私は今プラネテューヌの教会用意された部屋にて小説を読みながら寝間着にてのんびりと紅茶を飲んでいるところである。これが正しい休日の過ごし方であろう。

「私が待ち望んでいたのはきつとこういうのだね、優雅だよ。」

前のゲームギョウ界ではあり得なかっただろうね。

優雅な私はお茶菓子に用意した手製のクッキーをつまみつつ小説のページをめくる。

すると不意にドゴンドゴンと控え目にドアをノックする音と共に……。

「ユーちゃん今大丈夫？」

この声は狩人ネプギアちゃんだろうか？ いきなり私の優雅な時間が破壊される予感である。ただどこを無視などすればそれこそネプギアちゃんの事だから扉を切り捨てても突入してくる可能性も……さすがにないかな？

まあいいさすがに寝間着は失礼だから着替えるでしょう。

「ユーちゃんいないの？」

「ごめんネプギアちゃん今ちょっと着替えるから。少し待って。」

「ええ!! なら私手伝うよ!!」

何故ネプギアちゃんに手伝ってもらわねばならない? それと鍵がかかっているからといってドアノブをそんなにガチャガチャ動かさな
いで欲しい。本当に扉が使いものにならなくなってしまおう。
とりあえず早く着替えてしまおう。

ユーお着替え中……………。

着替えが終わる頃には扉はガタガタでいつ破壊されてもおかしくは
なかったであろう。

「こうなったらMPBLで扉を……………」

「それは止めてネプギアちゃん!! 今開けるから!!」

あんな物を射たれたなら俺の部屋が破壊されてしまう。

「ユーちゃんお着替えしよう!! 早く脱いで!! 私手伝うから!!」

扉を開けるといやもはや扉を外すとネプギアがキラキラした目で物
凄い勢いで入ってくる。

「もう着替えは終わったよネプギアちゃん。」

打って変わって絶望したような表情で膝をつくネプギアちゃん。

「え? そんな……………これじゃあゲームギョウ界が壊れちゃう
よー!!」

いや壊れないよ。何で私が着替えただけでゲームギョウ界が壊れる

の？ そうしたらゲームギョウ界既にかなりの回数破壊されていることになるけど。

「ネプギアちゃん落ち着いて。一緒にお茶しよう？ ほら座って。」

私は膝について座り込んでいるネプギアちゃんに手を貸して立たせる。

「……………うん。」

「クッキーもあるけど食べる？ 私が作ったから美味しくないかもしれないけど。」

「ユーちゃんが作ったクッキー！？ 食べる食べる！！！」

「なら座って待ってて。今紅茶を淹れ直すから。」

「うん！！！」

ユー茶淹れ中……………。

「ネプギアちゃんお茶淹れてきたよ。」 「ユーちゃんありがとう！ それとクッキー美味しかったよ！！！」

「そ、それは良かった。」

良かったのだが全部食べてしまったのか。私のクッキーが……………。

「それで今日はどうしたのネプギアちゃん？」

「ふえっ、何が？」

何が？ってまさかただクッキー食いに来ただけかこの嬢ちゃんは。

「何かようがあつてきたんじゃないの？」

「よいしょ、えーと……そうだ思い出したユーちゃんに渡す物があつたんだ。」

ネプギアちゃんは自ら座っている椅子ごと身体を動かして俺に擦り寄る。だがここで私が横にずると確実にさらに擦り寄って来るのであろう。

「……………渡す物？」

「これだよ！はい、どうぞ。」

ネプギアちゃんが私に渡してきた物は白い布に包まれた細長いものであった。……………もしかしてこれって。

「ネプギアちゃんこれもしかして！？」

「うんユーちゃんに頼まれていた剣、確か零刹那だったけ？修復と改良終わったよ。」

頼んだのではなくてネプギアちゃんが勝手に持っていたんだけどね。零刹那、かつてジャツジ・ザ・ハードとの闘いで刀身が折れてしまった刀。私は鍛冶屋に持って行こうとしたのだけどプラネテューヌの鍛冶屋は何者かの襲撃にあつて営業できる状態ではなくなっていました。その後何故か私が鍛冶屋を訪ねた事を知っていたネプギアちゃんに零刹那を強奪されたのであった。これは関係ないけれど襲撃された鍛冶屋では白い何かが目撃されたとの事。

それにしても改良って聞こえたんだけど嫌な予感しかしない。

「さあ開けてみてよユーちゃん。」

「わ、わかった。……………え？」

布を外してみるとそこから出てきたのは確かに鞄にしまわれた零剎那だった。ただ色がピンク一色だったけど。

「ね、ネプギアちゃんこれって何でピンク？」

「ユーちゃんも女の子なんだからやっぱりカラーリングはピンクが良いよね。それにユーちゃんに凄く似合ってるよ!!」

あまり嬉しくない。まあ色なんて関係ないよね？問題は切れ味と強度だから。そう思い私は立ち上がりネプギアちゃんから距離をとりつつ零剎那を鞄から抜く。そして直ぐに鞄に納める。

「ユーちゃんどうしたの？」

「えっと刀身までもがピンクなのは予想はしてたんだけど刀身にどこかで見たことある人がしかも私の前で今優雅に花茶を飲んでる人が描かれていた気がするんだけど……………」

「やっぱり気付いちゃったかなあ？えへへ私照れちゃうよー。」

いやこちらはドン引きなんですけどね。私は恐る恐る零剎那をもう一度鞄から抜き放つ。そこに描かれていたのは言うまでもないがこのプラネテューヌの女神候補生ネプギア（女神化前）。指を組んでこちらをじっと見つめている。裏返してみると今度は女神化したネプギアが俺を見つめていた。とりあえず窓から零剎那を投げ捨てようと考えてしまった私は悪くないはずだ。

「ほら私の中にはユーちゃんが描かれているんだよ。最近は凄いいよね、

剣にもこうやってプリント出来るんだから。」

ネプギアちゃんを取り出した剣には何故か私がプリントされていた。とりあえず何とかしなくては……………可笑しい誤解をされてしまう。

「あ、それと柄の所に付いている赤いボタンを押してみてユーちゃん。」

なにボタンって本当にあったよ。嫌な予感しかしないのだけれどこうなれば流れに身を任せるのみだ。

「わ、わかった押すよネプギアちゃん。えいやっ、ってなんですとー！？」

……………飛んだ。何が飛んだのかって？そんなの決まってるでしょう刀身が。天井を突き抜けて遙か上空へと……………。

「凄いでしよう、これぞ名付けてロケットブレード！！」

ユーはロケットブレード（R・C・K・B）を強制的に習得した。

「どこから突っ込んだらいいものか。」

「安心して飛んでいったのはちゃんと戻ってくるから。私とユーちゃんの絆は絶ちきれないからね。」

「……………本当に戻ってきたよ。」

天井の穴から戻ってきた刀身は何事もなかった様に柄に収まる。

「それでね明日コンパさんとアイエフさんとクエストに行くからユーちゃんも一緒に行こうよ！！」

「ま、まさかそのクエストでこれを使わないといけないの？」

「勿論！！それじゃあ私これから用事があるからまた明日迎えにくるからね。」

「う、うんまたねネプギアちゃん。」

まるで嵐の様に現れ嵐の様に去っていったネプギア。とりあえず完全破壊された扉と天井を直さないとね。じゃないとイストワールさんに怒られるからね。明日の事はまあそれから考えよう。

とりあえず寝ずに対策を考えたが……………。

「何も思いつかなかった。」

その結果アイエフさんとコンパさんに盛大に誤解されその誤解をとくのに2日かかったのは言うまでもない。さらにはロケットブレードが暴走して協会にいたイストワールさんに直撃したのは忘れたい歴史の一つである。

閑話 ネプギアの恐るべき魔改造（後書き）

ロケットブレード（RCKB）

ユーが愛用していた零刹那をネプギアが魔改良した恐るべき剣。全体がピンク色。刀身には女神候補生ネプギアが描かれている。刀身が簡易的ロケットエンジンを使用して飛翔する。

10回に1暴走する。

女神候補生ネプギアの歪んだ想いが籠められている為にどんな事があっても射出された刀身は必ず戻ってくる。

第六話 『ラストেশヨンの女神候補生』 (前書き)

正月なんて忙しいだけだと思ってしまふ自分は駄目なのだろうか？

第六話『ラストেশヨンの女神候補生』

ユー side

プラネテューヌにてゲームキャラの力を得た私達は現在ラストেশヨンのゲームキャラ及び女神候補生の力を借りる為にラストেশヨンを訪れていました。

「ここがラストেশヨン。本当に機械だらけの街なんですね！」

キラキラと目を輝かせて辺りを見回すネプギアちゃん。本当に機械が好きなんだね。

「やめてくださいダメ虫。田舎物丸出しではないですか。こっちが恥ずかしいです。」

「ファイ少し位はいいんじゃないかな。ファイにだって好きな物くらいあるでしょう？」

「まあありますが私の場合は物ではなくて人ですけどね。」

「ファイさん。それってもしかして!?!」

「無論マスターの事ですよ。」

「そ、そんなにストレートに言われると何だか照るね…。」

「駄目だよ!そんなのおかしいよ!?!」

「ネプギアちゃん?」

「貴女にくどくど言われる覚えはありませんが一応理由を聞きましょうか？」

「ユーちゃんは私のこ、恋人なんです！だからいくらファイさんがユーちゃんの事を想ってもそれは無駄なんです！だから諦めてください。：正直迷惑なんです。ユーちゃんも口では言わないだけで本当は：。」

たしかに迷惑かなネプギアちゃんのその思い込みは。

「マスター苦勞しますね。」

「言わないで：。」

言われても虚しくなるだけだから。

「とりあえずもういいかしら？」

「：アイエフさん。ごめんなさい。」

「あんたは謝らくてはいいわよ。ネプギアの事はコンパに任せて教会に向かうわよ。」

「いいのですか？」

「何とかなるでしょう。いくわよ。私達には遊んでいる時間なんてないのよ。」

「コンパさん私とユーちゃんはき、キスまでしたんですよ！これって立派な恋人ですよね？」

「そ、そうですね。ギアちゃんだから早く教会いくですよ。」

「ネプギアちゃんとはいずれ話をつけなきゃいけないのかな？」

「あまりに酷くなれば私が話をつけますのでご安心ください。」

「あ、ユーちゃん何の話をしてるの？良かったら私にも聞かせて？」

コンパさんとの話が終わったのか私に寄ってくるネプギアちゃん。

「大した話じゃないよ。」

「なら良いんだけど。あのねゲームキャラさんが見つかったらなんだけど……。その、私と一緒にこのラステイションをいろいろとまわってみない？」

「うん。別に良いよ。」

「無論私も同行しますが。」

「ファ、ファイさんいい加減にしてください！貴女がいたらユーちゃん困るじゃないですか！」

「え？私は別にいいよ。三人でまわれれば良いだけだし、なんならコンパさんとアイエフさんも一緒にまわりませんか？皆でわいわいした方が何かと楽しいと思いますよ。」

「何でも良いけどさっさと行くわよ。」

「ご、ごめんなさい。今行きます！」

「あまりダメ虫と関わっているとこっちにまでダメダメが移りそうですね。」

そう言う私の一步後ろを歩き出すファイ。

「ギアちゃんも行くですよ。」

「どうしてファイさんは邪魔をするんでしょうか？勝ち目はないのに…。私とユーちゃんは固い絆で結ばれているんですよ！」

「わ、わかったですからギアちゃん落ち着いてくださいです。」

コンパさんはネプギアちゃんを必死に引っ張ってきていました。今度コンパさんに何かご馳走しようかな？

……一行移動中……

「教会に到着だね♪」

「マスター現実逃避はやめましょう。ここはギルドですよ。」

「さてとこの教祖様に挨拶しないとね。」

「ギルドに教祖はいませんよマスター。」

「ねえファイもしかして私…。」

「今のマスターの状況は迷子です。」

「み、皆が迷っただけで…。」

「迷子です。」

「もしかしたらね。」

「迷子です。」

「……。」

「とりあえず誰かに道を聞いてみましょうか？」

「そうだね…。」

ネプギアちゃん達と一緒に教会に向かった筈の私は何故かラスティシヨンのギルドにファイと共にいました。まさか本当に私は迷子になったのだろうか？

気を取り直して私は誰かに道を聞こうと辺りを見回すんだけど……。

「誰もいないね。」

「どうやらこのラスティシヨンもほとんどがマジェコンヌの手に堕ちているようですね。」

「そうだね。誰か人が……いた！」

見ると一人の女の子がギルドにてクエストを受けようとしている様だけど。

「とりあえずあの娘に聞いてみよう！あのー、すみません！！」

「ん、こども？」

「マスターは見た目は可愛らしいこどもでも中身はとても良い味を出しているですよ。」

「ごめんファイは黙って。唐突にすいません。よろしければ教会までの道を教えていただけないでしょうか？」

黒い髪の毛を両結びにし、黒を全身で体現した少女は少し戸惑いながらもこちらの問いに答えてくれる。世の中捨てたもんじゃないね。

「別に構わないけど。教会まではここから一本道だから……。」

……少女説明中……

「ありがとうございます！」

「別に気にする様な事でもないわ。」

「よし！教会に向かうかファイ。」

「了解です。」

黒い女の子にお礼を言った後私は彼女から聞いた道を進み教会へと向かいます。

ユー&p;ファイ移動中

「教会に到着……なんてできなかった」

気がつくと私は再びギルドにいました。どうして…？

「今まさにマスターの方向音痴スキルが開花しました。」

ユーは方向音痴スキル【D】を取得しました。

「あんまり嬉しくない。」

「何よあんた達まだいたの？」

「お、お願いします！助けてください！」

「な、何よいきなり！？」

方向音痴スキルが開花してしまった私の前に再び現れる黒い少女。

「マスターの方向音痴スキルが開花してしまった為に私達が教会にたどり着くのはほぼ不可能になってしまったのです。」

「待ってよ！もしかしたらファイのせいかもしれないよ！」

「言われた方向とは全く逆方向にばく進するマスター。見ていても面白かったです。」

「どうせ私のせいだと思ったよ…。」

「よくわからないけどさっきのだと説明不足だったわけね。ちょっと待ってなさい。」

「は、はい。」

「これでよしと。はいどうぞ。」

何かを紙に書き手渡してくる少女。まさか不幸の手紙!?

「これは地図ですか？」

「初めてここに来た私から見ても意外と分かりやすい地図ですね。」

黒い少女から手渡された紙を覗き込む私とファイ。どうやらこの黒い少女は親切な少女なようだ。

「それなら分かるでしょう？」

「はい！何から何までありがとうございます。」

「べ、別に大した事はしてないわよ。ほら用がすんだらならとつとと行きなさいよ！」

お礼を言うと顔を赤くして顔をそらす少女。まさかツンデレニウム…。

「本当にありがとうございました。」

「なかなかやるではないですかツンデレラ。」

「はぁ!？」

「ご、ごめんなさい。ほら行くよファイ。」

「何だったのかしら？」

ファイを抱き抱えてギルドを去る私。あの心優しき少女とはまたいつか会える様な気がする。そんな予感を感じながらも私は教会への道を進みます。

ユイ&ファイ移動中…

どうやら私は自身に備わった方向音痴スキルを侮っていたようである。

「……………」

現在地ラストেশヨンのギルド。私は膝をついていました。ファイはそんな私を見下ろしていました。黒い少女はそんな私をかわいそうな物を見る様な目で見つめていました。

「おや、また会いましたねツンデレラ。」

「どうやったら迷えるのよ。」

「ごめんなさい。地図通りに行ったらまたここにいて…。」

「マスターの方向音痴なめないでください。」

「はあ。しかたないわね。私が教会まで案内するわ。」

「すみません。ご迷惑おかけしますがお願いします。」

「仕方ないから案内されてあげます。」

「「なんで上から目線なの（よ）!？」」

「まあいいわ。いますぐ案内してあげたいところなんだけど私今からクエスト受けるからここで待っていて。」

「あ、それなら私も手伝いますよ。」

「あんたが？まだ子供じゃない。」

「あはは。こう見えても強いんですよ。」

「ふーん。まあいいわ足だけは引っ張らないでよ。えーっと。」

「あ、私はユーです。」

「ユーね。私はユニよろしくね。それと敬語はいいわ。堅苦しいのは嫌いなよ。」

「はい、じゃなかった。うん、よろしくねユニちゃん。」

成り行きで一緒にクエストを受ける事になってしまったユニちゃん。マジエコンヌによって世界の殆どが牛耳られてしまったなかどうし

て彼女の様な女の子がクエストを受けようとしていたのだろうか？

ネプギア一行side

「ユーちゃん何処に行っちゃったの！？まさか誘拐されたんじゃないか？！！」

「落ち着きなさいネプギア。ファイも見当たらないから一緒にいるんでしょ。」

「そうですよギアちゃん。ファイさんとユーちゃんなら大丈夫ですよ。」

「まさかファイさん私からユーちゃんを取り返せないからって無理心中しようとして…。ユーちゃん。ユーちゃああああああああああああああああああん！！」「コンパとりあえずネプギアに鎮静剤を射っておいて。それから教会まで引っ張っていくわよ。」

「了解です。」

彼女達もいろいろと大変そうでした。

次回予告

謎の少女ユニと共にクエストを受ける事になったユー。そんな二人

の前に再びマジエコンヌの下っ端が立ちはだかる。
そしてネプギア、アイエフ、コンパの三人はラストেশヨンの教祖
ケイと出会う。

次回超次元ゲームネプテューヌmk2 男の娘だった女神候補生
第七話『ボクが真っ黒ケイだ』

ラストেশヨンの教祖は人間を超えていた。

第六話『ラステ이션の女神候補生』（後書き）

ユーちゃんの部屋

ユー（着物装備）「みなさんあけましておめでとうございます。司会進行のユーです。」

ファイ（着物装備）「あけおめですみなさん。毒舌アシスタントのファイです。」

ユニ（着物装備）「新年初めてのゲストのユニよ。」

ユー「今日は無礼講というわけでおせち料理を作って来ました。三人でたべましょうか？」

ファイ「黒豆と栗きんとんは私のです。」

ユニ「はあ！？黒豆は私のよ！」

ファイ「どんだけ黒いの好きなんですか？だからと言って黒豆は渡しません。」

ユニ「いいわ！ならこのはごいたで勝負よ！」

ファイ「いいでしょう。貴女の全身を墨で黒く染めてあげましょう。」

ユー（今のうちに伊勢海老は確保しておこう…。）

ネプギア「ユーちゃんのおせちiiiiiiiiiiiiiiii！」

ユー「ネプギアちゃん！？駄目、私の伊勢海老返してよ！とりあえず良いお年をー！！」

第七話『真っ黒ケイ』（前書き）

ネプギアは軽度のヤンデレ

ユニは苦勞人

ならロムとラムはどうしよう？

第七話『真っ黒ケイ』

ユー side

現在私とファイ。そしてユニちゃんはクエストを終えてダンジョンから帰路についているところでした。

「ユーあんた意外とやるじゃない。」

「そ、そんな事ないよ。それにユニちゃんの方がもっと凄かったよ。」

「ありがとう。お世辞でもうれしいわ。」

「お世辞じゃないよー。」

「なんでしようこの疎外感は…。でもマスターが純粹に笑うところなんてこのゲームギョウ界に来てから初めてですね。ここは暖かく見守りましょう。」

ファイは数歩後ろに下がって何やら授業参観での保護者的な表情でこちらを見つめていました。どうせなら一緒に来て話せばいいのに。

「あの、そのユーにお願いがあるんだけど…。」

ふとユニちゃんが何かを思い立ったかの様にこちらに声をかけてく

る。

「ん？私で出来る事なら何でもするよ。」

「私と友達になってくれないかしら？私同年代の友達がいなくて…出来ればユーと友達になりたいというか。ああもう私と友達になれない！！」

最初は気恥ずかしそうに後半は何故か目を吊り上げて怒り気味で命令口調。

それにしても友達かあ。あれ？私って友達いたっけ？

「恥ずかしがったり怒ったり忙しいツンデレラですね。」

「素直になれないだけじゃないかな？ユニちゃん私で良ければ友達にしてくれる？」

「し、しかたないわね！そこまで言うなら私の友達にしてあげるわ。」

「ありがとうユニちゃん。」

「そ、そんなにお礼しなくてもいいわよ！寧ろお礼をしたいのはこっちというか…。」

ユニちゃんが今までにない慌て方しているのを私とファイが生温い視線で見つめている時でした…。

「なあにいちやついてやがんだよ！」

突如現れた肌の褐色が悪い人。どこかで見たような？

「誰よあんた？」

「あ、あなたは！？」

「ここであつたが百年目だ！あの化け物女神候補生はいねえならこちのものだ！」

「誰よあれ？ユー知り合いなの？」

「彼女は、彼女は………誰だっけ？」

いろいろと思いだそうとしたのですが思い出せませんでした。

「てめえ人の事馬鹿にしがって！」

「マスターあれはマジエコンの下っ端ですよ。」

「ああそういえばそうだっけ？」

ネプギアちゃんにフルボッコにされていた人だっけ？確かに肌の色は悪かったような…。

「犯罪組織の………！？」

「うん！たぶんラステイションのゲームキャラを狙っているんだと思う。」

「そんな事させるわけはいかないわ！」

「ああ？なんだてめえ邪魔するなら容赦しねえぞ！？」

「ユーここは私に任せてくれないかしら？」

「待って、マジエコンヌのシェアが強まっているせいであの下っ端もそれなりに強くなっているんだ。」

「大丈夫よ。私には奥の手がある。」

「奥の手？」

「ええ。あのねユー私今から少し…ううんかなり可笑しくなるんだけどそれを見ても友達でいてくれる？」

「よくわからないけどユニちゃんの事嫌いになるはずないでしょう？」

「どうしてそう恥ずかしい事堂々と言えるのよ！まあいいわ黙ってそこで見てなさい！行くわよ三下！」

「はあ！？てめえが相手するのか？馬鹿にするのもいい加減に「プロセツサユニット装着！！」……………！！？」

光に包まれたユニちゃん。その光は私やネプギアちゃんがプロセツサユニットを装着する時に発せられる光と同一の物。そしてユニち

やんの口から紡がれた言葉から導き出される答えは…………。

「まさかユニちゃんがラステイションの…。」

「女神候補生だったという事でしたか。」

「装着完了よ！」

光がおさまりそこにいたのは黒のプロセッサユニットクレイドルに身を包んだユニちゃん。このラステイションの女神候補生ブラックススターが悠然と立っていました。

ネプギア side

その頃アイエフとコンパはラステイションの教祖ケイと面談していた。ネプギアは意識を失いアイエフの背に担がれていた。

「初めましてボクがこのラステイションの女神候補生のケイだ。」

「貴女がこのラステイションの女神候補生なの!？」

いきなりケイより発せられた問題発言に驚きを隠せないアイエフ。しかたもない教祖を呼んだらケイが出てきたのだから。ケイが教祖だと思ってしまうのも仕方がない。

「いいや、ボクは教祖だよ。君の耳はどうかしているんじゃないの

かなアイエフさん。」

「何よこいつ腹立つわね。」

だがケイが女神候補生な筈がない。ただのケイのブラックジョークであった。

「アイちゃん抑えるです！」

「良いねえアイエフさん君のその怒りを無理矢理隠そうとする表情。ゾクゾクするよ。」

アイエフの反応にニヤニヤと笑うケイ。ただし目は笑っていなかった。

「うざっ。それで私達はこのラスティションのゲームキャラについて聞きたんだけど。知ってるなら教えてくれないかしら？」

「ああゲームキャラね。実はボクがそのゲームキャラなんだ。」

「喧嘩売ってるの？」

「だだのジョークだよ。そんなにムキにならないで。程度が知れるよ。」

「コンパこいつ解体していいのかしら？」

「アイちゃん抑えるです！」

「では本題に入ろうか。ボクはゲームキャラの所在を知っている。だけどそれを簡単に教えるわけにはいかない。」

「ど、どうしてですか！？犯罪組織が狙っているんですよ！」

「それは君がピンク色の下着をはいているせいだコンパさん。」

「ひいー！！ど、どうして私の下着の色知ってるんですか！？」

「住民一人の晩御飯の献立から美少女の下着の色まで、はたまた国家の重要機密までボクにわからない事はない。寧ろあったら教えてほしい。」

「なんなのよこいつ。それでどうしてゲームキャラの所在を教えてくださいたくないのよ？」

「私の下着が気になるなら着替えてくるです！」

「そんなわけない。君は馬鹿じゃないのかいコンパさん？」

「コンパ抑えるのよ！」

「胃が痛いですよ。」

「今現在情報ですら売買される時代だ。ゲームキャラの情報を教えるかわりに労働力を提供してもらう。そこで達には血晶と宝玉を探してきてもらおう。」

「なによ！どっちもかなりのレアアイテムじゃない！」

「そう言われてもね…。なら最後にもう一押しと行こう。君達がい

いやネプギアさん。君が探しているユーと言う所属不明の女神候補生が何処にいるのか教えてあげよう。」

「どこ！ユーちゃんは何処なの！？教えて！教えてください！！何でも言う事聞きます。何でもします！だからユーちゃんは何処にいるのか教えてください！」

アイエフの背に背負われていたネプギアは突如目を覚ましそのままアイエフを蹴り倒す。

「そんな！シカベードだって1日は目覚めない睡眠薬にエンシェントドラゴンがチワワなみにおとなしくなる鎮静剤の危険なブレンドの薬品を射ったのに！普通は目覚める筈ないですよ！！」

ネプギアは既に取り返しがつかなくなっていた。

「良いねえネプギアさん。君のその表情アイエフさんとは違ったゾクゾクを味わえる。」

「教えて！教えてよ！ユーちゃんの事を。教えてよオオオオオオオオオオオオ！！」

ケイの襟首を物凄い勢いで揺すり懇願するネプギア。

「落ち着いてくれるかな？君の愛するユーさんは今この近くのダンジョンでクエストに挑んでいるようだよ。」

「また何でクエストなんて受けてるのよあの娘。」

ネプギアに現在進行系で踏まれているアイエフは呟く。

「なら早く行きましょう！」

「仕方ないか。ネプギアがこの状態じゃあまともにゲームキャラ探しなんてできないわね。」

「そうですね。ギアちゃん行くから落ち着いてください。」

駆け出そうとしたネプギア。それを追いかけ様とするコンパとアイエフ。だが再びその背に声かけられる。

「ああそれとこれは警告なんだけど。今ユーさんはラステイションの女神候補生のユニと一緒にいるようだ。」

「何なんですかその女!？」

「落ち着いて聞いてくれるとありがたいネプギアさん。このラステイションの女神候補生のユニは無類の女好きでね。ラステイションの美少女をその毒牙にかけてしまうのは珍しくはない。」

「……………!？」

「ユーさんはかなりの美少女みたいだから今頃ユニの毒牙にかかって大変な事になっているだろうね。」

ケイにより突き付けられた事実（嘘）によりネプギアの顔から色をうしなわれ目から光は消え去る。

「あ、いや。そんなユーちゃんが!? ユーちゃあああああああああああああああああん!!!」

悲鳴をいや咆哮をあげるとネプギアの身体が光に包まれ女神化を果たす。そして駆け出す。自らの大切な物を汚そうとする存在を排除するために…。

「ちょ、ちよつとネプギア何処に行くのよ!?!」

「ギアちゃん待ってくださいです!!」

それを追って駆け出すアイエフとコンパ。そしてその光景をケイは黙って見つめていた。

「ユニ悪く思わないでくれ。革命に犠牲は付き物だ。今回の犠牲者が君なだけだったんだよ。」

その言葉は誰もいないラストেশヨンの教会によく響いた。

ユー s i d e

「め、女神候補生だど!?!」

「ユニちゃんが…。」

「さあ絶滅タイムよ。ありがたく思いなさい。X・M・B・改!!!」

女神化したユニちゃんはX・M・B・改の銃口を下っ端に向けて容赦なく引き金をひく。

「うおわっ!?!」

地面を転がって銃弾を避ける下っ端に次々と銃弾を放つユニちゃん。その表情は冷酷で冷たく敵に向ける物としては格別珍しくもなかったのだけれどどこことなく私はそんなユニちゃんが少し怖いと思ってしまう。

「良い逃げっぷりね。でもこれは序の口よ! さあ踊りなさい!」

X・M・B 改を下っ端の急所の全てを狙って連射するユニちゃん。下っ端に直撃したのは実弾。とても正確な射撃、だけどそれでも倒れない下っ端もタフな物である。

「て、てめえいい加減にしやがれ!」

「いいわ。いいわねその表情!?! さあもつと無様に転げ回りなさい!?! クリミナルパーティーはこれからよ!」

新たに下っ端に向かって放たれる実弾。しかしそれは下っ端に当たる事はなく下っ端がいた地面のすぐ近くに着弾する。そして着弾した弾は地面にぶつかった瞬間に中規模な爆発を起こして下っ端を火に包む。あれは見るに炸裂弾の類だろう。

「がはあっ!?!」

「何当たってるのよ。つまんないわねえ。とどめいくわよ!?! X・M・B タイプR」

光に包まれたX・M・Bはその形状をライフルを模していた姿からミサイルランチャーに酷似した姿へと変える。

そしてそれを一瞥して身体に炸裂弾の爆風によって火がついた下端が文字通り転げまわる姿をを嬉しそうに見つめて変化したX・M・Bの標準を定める。

「あ、あれはまさかRPGですか!？」

「え? ロールプレイングゲームがどうかしたの?」

「RPGっていうのは肩撃ち式の対戦車無反動砲の略でこの様なところでぶっぱなす物ではないのですが…。とりあえずマスター伏せてください巻き込まれますよ。」

「ああうん。」

いつもより少しだけ慌てた様子のファイに少しだけ驚きながらも私は言われた通りに身体を伏せて手を組んで頭を守る。それにしてもRPGはそんなに危険な物なのだろうか?

「よっこいしょ。結構良いのりごちですね。」

それは良かったね。でもファイは何故私の身体に跨がるのですか?

「墜ちろカトンボ!!」

放たれたRPGは鼓膜を破壊するかの如く爆音を出しながら下っ端を……………。

「これで勝ったと思うなよー!!」

着弾したRPGはダンジョンの一部を破壊していた。よく見ると火が上がっている箇所もあった。

「凄まじい威力ですね。」

「何でもいから早く退いて。」

そろそろファイの重みのせいで腰が痛くなってきました。

「物足りないわね。あああああああああ!!」

XMBを叩きつけるとユニちゃんはしゃがみこみ拳で地面を殴りつけ始める。あ、あれは放っておくのはまずいとめなくては。

「ゆ、ユニちゃん落ち着いて!!」

すぐにユニちゃんの地面を殴りつけている右手を自らの両手で包み込む様にして優しく握り声をかける。

「ゆ、ユー？　そうか私またやつちったんだ。」

正気を取り戻したのか女神化を解いたユニちゃんは私が握りしめていた自らの手を見つめるとため息をつく。

重苦しい雰囲気になえきれなくなった私はユニちゃんに話しかける。

「えっとユニちゃんがラスティションの女神候補生だったんだ…。」

「そうよ。ラスティションの女神候補生は私よ。でも女神化したら性格が破壊的になるといえるかなんというか。はあ、さっきの見た後でもユーは私の友達でいてくれる？」

「もちろん。それにユニちゃんのは見たところ女神化したら性格がちょっと乱暴になるみたいだけど世の中もつと酷い人もいるから安心して、ね？」

○プギアちゃんとかネプ○アちゃんとか……………。

「あんた良いやつね…。」

「それ程でもないよ、それに私も…。」

私もユニちゃんと同じだからという事を教える為に私は一瞬だけ女神化してすぐに解除して見せる。

「ユーあんたその姿は女神!？」

「ユニちゃんと同じ女神候補生だよ。」

「やっぱり、やっぱり…。ユーあんたも私を騙して「落ち着きなさいツンデレラ。」へぶうつ!?!」

私の女神化を見て目の色を変えて掴みかかろうとしたユニちゃんの後頭部にファイによって火球がぶつけられる。展開が早すぎて私には理解ができていませんでした。

「ちよっ、ファイ何やってるの!?!」

「こういう類いの人類、いえ女神でしたね。一度感情に火がつくと勝手に盛大な誤解を始めてしまう物なのです。そこで一度頭を冷やしてもらおうかと思ひまして。」

「待って感情じゃなくてユニちゃんの髪の毛に火がついて!!冷やすどころか熱くしてるから!水、水を掛けて!!!」

「あ、片方燃えた…。」

事情説明中

とりあえず夜笠の中から出した大量のオレンジジュースでユニちゃんの髪の毛についた火を消火した私は意識を取り戻したユニちゃんに自分の身の上を話していました。

「なるほどユーは別世界の女神候補生で姉から逃げてきたということね。また私の早とちりなのね。」

「もう少し早く言えば良かったんだろうけど。でもどうして「マスターに危害を加えようとしたのですか。」…。」

「別に危害を加えるつもりはなかったわ。ただユーがプラネテューヌの女神候補生かと思っただけだから。」

「ぶ、プラネテューヌ!？」

「ええ。私はプラネテューヌの女神候補生だけは許せないから。」

「そうですか。なら私と一緒にですね。私もプラネテューヌの女神候補生を許す事はできません。マスターを手込めにしようとしたプラネテューヌの女神候補生を。」

「ち、違っ…。いや違わないのかな? 寧ろ当たっている?」

ネプギアちゃんが今まで私にしてきた事を思い返しているその時でした。

「ラストেশヨンの女神候補生ユニイイイイイイイイイイイイイイイイ!! 貴女を殺しますうううううううううううう!! そしてユーちゃああああああああああああああああん!!」
もはや以前の私ですら出す事は出来ないであろうスピードを出して低空飛行をしているネプギアちゃん。右手にはMPBLを左手には赤く染まった人間二人らしきもの。

「何よあれは?」

「あれがプラネテューヌの女神候補生です。」

「ああ私終わった。」

きつと私はあのネプギアちゃんに蹂躪されてしまうのであろう。

「あれがプラネテューヌの女神候補生。」

「貴女みたいな変態で可笑しな髪型の人にはユーちゃんはわたさな
い！」

「髪型？よくわからないけど本気でやらせてもらおう覚悟しなさい
！！プロセッサユニット装着！！」

二つ結びが一つ結びになってしまったユニちゃんは女神化する。良
かった女神化すれば髪の毛も再生するんだ…。
それは別としてユニちゃんを助けないと！

「私は一体どうすれば…。そうだファイ何か方法は。」

「これは面白い展開になって来ましたね。」

駄目だファイはこの状況を楽しんでいる。私が何とかしなくちゃ。
眼前に対峙する二人を見つめながら私は覚悟を決めていました。

次回予告

教祖ケイの策略によってネプギアとユニは対峙する。その時ユーは！？

そしてゲームキャラの所在は！？

次回超次元ゲームネプテューヌmk2 男の娘だった女神候補生
第八話『ダメ虫対ツンデレラ』

その闘いは3日3晩続いたそうナ。

第七話『真っ黒ケイ』（後書き）

ユーちゃんの部屋

ユー「こんにちはユーです。今回のゲストは前回と同じユニちゃんなんですけど…。」

ファイ「……………」

ユニ「今回私が紹介するのはこのX・M・B。改よ。原作のXMBの改良型で七つの顔を持つ万能武器よ。通常形態のノーマルフォルムは原作の物と同じ実弾も射てればビームガンも射てるわ。RモードがRPGでGモードがガトリングガン。1秒間に1000発の銃弾を放つ事が可能よ。ただし空薬莖の後始末が面倒なんだけどね。次がSモードのスナイパーライフル。どんなに離れた敵にでも瞬殺よ。」

ファイ「のこりは秘密です。」

ユー「ちなみに作者のトマト畑はなんであんな武器をユニ使用させたの？」

ファイ「現段階で考えていた女神候補生達が変貌を起こすなかでツンデレラ（ユニだけあれ？こいつ弱くね？的な感じになるかも知れないからだそうです。」

ユニ「身もふたもないわねでは次回もお楽しみに。」

ユー「わたしのセリフが!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5219z/>

超次元ゲームネプテューヌmk2 男の娘だった女神候補生

2012年1月8日00時52分発行